

『後撰集新抄』翻刻(九)

日向一雅

### A Transcription of *Gosenshū Shinshō*(X)

---

*Gosenshū Shinshō*, published in 1814, is a representative commentary on the *Gosen Waka Shū*. It was once reprinted between 1910 and 1912 by the Kasho Kankō-kai but has since become a rare book. According to the General Bibliographical Index there are only ten complete sets in existence. Although unlisted in the Index, the library at Seishin Joshi Daigaku is in possession of all 15 volumes of the set. In vols. 64, 66, 67, 68, 70, 71, 72, 76 and 77 of *Seishin Studies* I presented a transcript of the "Bekki" volume and volumes I, II, III, IV, V, VI, VII and IX. For this issue I have transcribed volume X.

後撰集新抄恋 十(外題)

後撰和歌集卷第十新抄

恋歌二

はじめて女のもとに一本  
女のもとにはじめて、つかはしける

藤原忠房朝臣

六〇二 人を見て思ふおもひもあるものをそらに恋るぞははかなかりけり抄ける

○人を逢見初ことだにて、それよりして、恋しく思ふおもひもあるものなるを、それを我は、君に逢見初もせず、しられもせず、あてなしに恋しくのみ思ひて居るは、はかなきことなるよといひて、さるゆゑにかく、心の中を君にしらするぞとなり。此歌のてにをは本集の方、まさりざまに聞ゆるなり。

みぶのたゞみね(二オ)

六〇三 して家集へ抄  
ひとりのみ思ふはくるしいかにしておなじ心六帖に人を、しへん

○いかにしては、俗言に、イカヤウニシテ、といふに同じ。我一人にて思ひてのみ居るは、苦しき事なるを、いかやうにして、我と同じ心になりて、相思ふやうには、人を教へさどさんといふなり。

六〇四

我心いつならひてか見ぬ人をおもひやりつ、こひしかるらむの一本又六帖

きのとものり

〇見もせぬ人を、そのけはひ、其心ばへなどを、とやあらん、かくやあらむなど、思ひやりつ、こひわたる心は、いつかさやうにしならひたることならん。わが心は、あやしき心にもある事かなとなり。古今、<sup>一恋</sup>「世の中はかくこそありけれふく風の目に見ぬ人も恋しかりけり。

まだとしわか、<sup>のく侍又ノ一本</sup>りける女に、遣しける(二〇)

<sup>人の許へ一本</sup>源中正

六〇五

葉をわかみほにこそいでね花ず、きしたの心にもすばざらめや

〇ほにこそ出ねは、いまだあらはしてそれといひこそせねといふ意、下ノ句は、我内心には、我物と標シメおかざらんやとなり。伊勢物語、「うら若みねよげに見ゆる若草を人の結ばん事をしぞ思ふ。大和物語、此忠岑がむすめありと聞て、或人なん得んといひけるを、いとよきことなりといひけり。男の許より、かのため給ひし事、此頃のほどにとなん思ふといへりける、返事に、「我宿の一むらす、きうらわかみむすび時にはまだしかりけり、となんよみたりける、まことに、いとちひさきむすめになん有ける、とあるなどの類なり。

人をいひは<sup>めん異</sup>むとて

兼覧王(二二五)

六〇六

あしひきの山下しげく<sup>み</sup>はふ葛のたづねて恋る我としらずやなん一本

○抄に、序歌なり。はふ葛は、至らぬくまもなくはへば、尋てといはんとてなり。便なき方をも、しひていひよるといはんとて、尋て恋ると、よみ給ふなるべしとあるが如し。

忠房朝臣

六七 かくれぬにしのびわびぬる我身かなるでの蛙となりやしなまし

○井手あたりの蛙の、草深き沼などに、忍るても、つひにはあらはれて鳴が如くに、我も世に深く忍び居たれど、しのびあぐみたれば、今は声たて、鳴やせんとなり。曾丹集「山吹もまだちらなくに春もいぬゐでの蛙に身をやなさまし。かくれぬは、隠沼にて、草深く生ひしげりなどしたる沼をいふと、心得べし。新古今一「人づてにしらせて三し二がなかくれぬのみこもりながら恋やわたらん。井手は、山城の、井手の玉川の井手なるべし。蛙にも名ある所なればなり。但しかくれぬは、もとこもりぬ沼の訓をあやまれるなり。こもりくを、かぐらくと誤れるに同じ。万葉二に「はにやすの池の堤の隠沼こもりぬのゆくへをしらにとねりはまどふ、とあるこもりぬは、池の如く、外へ流行方なく、つゝめる水をいふ也。又井手といふも、山城の地名のみにはかざらず。もとは田に水を沃うする井の手をいふ事なり。されどこれらは、此歌の一首の意にかゝる事にはあらず。此歌、異本又ノ一本には、年月をへて、忍ていひ侍ける人に、とあり。一本には、いと忍たる人を、月日へていひつかはしける、とあり。歌の二ノ句の詞などあぢはひ見るに、詞書ある方まさるべし。(三)

女のさうしなによるな立なよりなつて、物など

いふついでに又ノ一本  
いひついでに申てのついでに 一本

藤原輔文ふちはらのすけもと 又一本  
源助元げんすけもと 一本

六八

あふくまのきりとはなしに夜もすがら立わたりつ、よをもふるかな

○あふくまのきりとはなしには、逢ふといふ事はなくしての意なり。古今ここん陸奥歌に「阿武隈に霧たちわたりあけぬとも君をばやらじ待てばすべなし」とあるによられたるなるべし。立わたりつ、云々は、曹司のあたりを、夜るくゝに立さまよふけはひをいふなり。

ふみつかはせども、返事もせざりける女の許に、つかはしける

よみ人しらす

六九

あやしくもいとふにはゆる心こころかないかいかにしてかは思ひやむべきたゆ 拾遺一本同

○そなたのいとつれなければ、今は思ひ止んと思へば、さやうに思ふ（三三）によりて、かへりて思ふ心のさかりになる事かな。かやうに、我と我心にもまかせぬ心をば、いかゞして止め侍らんと云て、かばかりの思ひをば、すこしはあはれと思ひてくれよかしといふを、ふくめたるなり。いとふにはゆるとは、みづからかくは思はじと、いとへば、しか思ふにつれて、いよゝさかんになるをいふなり。俗の諺に、味無アヂナい物のにえぶとりといふに、よく似たる詞なり。早蕨巻に、「いとふにはへて、のび侍る命のつらく云々。河海抄（常夏巻）引歌に「にくさのみます田の池のねぬなは、いとふにはゆる物にぞありける、なども見えたり。」

くにもちが、おともせざりければ、遣しける

国くに 茂しげ 一本

本院右京（四才）

六〇 ともかくもいふ言の葉の見えぬかないづらは露のかゝりどころは

○草葉などのなくては、露のかゝるべき所はなし。我中も其如く、君の何ともかとも、いひおこせ給ふ御言葉の見えぬ事かな。かくては何所かは、此方のかゝり所には侍らん。かゝり所とは侍らず、さてもさてもうらめしき事には侍りとなり。風雅恋「つゆばかり頼む心はなけれども誰にかゝれる我ならなくに。

さて此歌四ノ句の、いづらははの文字は、歎息の音なり。つねにも、ハアと歎息をする、其はに同じ。此類れは此類に、れの添はりたるなり。上卷下卷十一葉に、日本建命の、阿豆麻波夜アママハヤ古事記にかくあり。昔紀とのたまひしなどに同じ。此類物のあはれの事を、委く云へるをも見合すべし。今源氏物語中などには、云々なるはやといへる事、いと多し。かくて此文字を、音便に、わの如く唱ふるは、ことにわろし。人々みづから、口にてよび試れば、よくしらるゝなり。歌、仲文集四ノに出て男のおともせざりければ、右京「ともかくも云々。返し」あだならぬ心にかゝる露なればいはでそ思ふおきてこしよりとあり。

題しらす

俊又ノ一本  
橘敏仲

六一 わび人のそほつてふなる涙河おりたちてこそぬれわたりけれ

○世間にて、わび人のそほちぬる、といふ涙川に、我も今おり立て、濡わたる事よとなり。おりたつとは、俗に踏込フミコテ、といふに近し。深く身を入る、事なり。

かへし

大輔

六三 ふち瀬とも心もしらす涙川おりやたつべき袖のぬるゝに

○君は、おりたちてぬれ渡るとのたまへども、此方の心の浅瀬、あだな深き淵スツツなるにや、知給はで、お

り立給ふべき事かは、御袖の濡侍る(五才)ものをといひて、敏仲主のたのめかけられたるを、あつかひたる意なり。

又

敏仲としなが 又ノ一本

六三

こ、ろ見に猶おりた、むなみだ川うれしきせにもながれあふやと

○淵とも瀬ともしらで、おりたつべき事かはと、我をいさめ給へども我はやはり、試におりた、ん。今は深しとも浅しとも知らねども、もしくうれしき瀬に逢ふ事も、あらんかと思へばとなり。こ、ろみには、俗言にいふ意に同じ。又、物ハタメシニと云にも近し。古今集などにも、いと多き詞なり。

わざとにはあらで、時々物いひふれ侍ける女の、心にもあらで、こと人にさそはれて、まかりにければ、の侍ける 又ノ一本とのゐもの。に、かきつけてつかは通所しける

○わざとにはあらでは、たしかにすみか通所と、定めたるにはあらで、といふ意なるべし。心にもあらでは、女の心として行々にはあらで、女は心ならずも、誘はる、まゝに、他ほかへゆく意也。とのゐ物は、夜具ヨルモノなり。これもと、禁中に宿直トノキする人の、其宿直所トノキゴにて、着て寝る物をいふなるを、此詞書などにいへるは、転ウツリて只夜の物といふ意にて、必しも宿直の事にはか、はらず。辨卷に、とのゐ物

て、契津法師、とのゐものは、夜のものなり、其みくろは、俗にいふ番袋なり云々、後撰集に云、まさた、がとのゐものを、とりたがへて、大輔がもとにもて来たれば、大輔「ふるさとの部のはじめよりなれにけりとも見ゆる衣か、返し、雅正「ふりぬとておもひもすてじから衣よそへてあやうらみもそする、と源注拾遺に出されたり。又主の小櫛に、とのゐ物の袋、拾遺にいへるが如し、猶とのゐ物といふ事は、これかれ物に見えて、まがひな(六才)し、又藤原経衡集に、越中守としなりと、宇治殿にて、同じ所によるふして、とのゐ物をとりかへて、袋に入れて侍ける、かへすと云々とある、これに袋も見えず明らかなりと、鈴屋大人のいはれたるがごとし。



藤原敦忠朝臣

六四 か、りける人の心をしら露のおけるものともたのみけるかな

○かくのごとく、人にさそはれて行くやうなる、君の心とはしらずして、此夜具も、そなたの置たる物と、頼たる事かなと也。三ノ句は、おけるといはん料のみなり。おける物とも云々は、とのる物を置たる事を表にて、衷の意は、君が心をば我にかけおきて、他心なきものとたのみたる事の、はかなさよといはんが如く、女の心を、危ふげなく思ひ居たるよしに、いへるなり。古今恋二「露ならぬ心を花におき初めて風吹ごとに物思ひぞつく、とあるは、此方の心を、かなたにつけ云々おくことにて、彼此の違ひはあれど、詞の意は同じ。

あひしりて侍ける女を、久しうとはず侍ければ、いたくなげくと人のつけ、れば一本いといたうなんわび侍ると、人のつけ侍ければ

○いといたうなんわび侍る」といふまでは、此作者に對ひて、告る人のいふ言なり。上下の三ツの侍といふ詞と、此わび侍るの、侍といふとは、さす所異なり。思ひ混ふべからず。

藤原顕忠朝臣

六五 鶯の雲るにわびてなく声を春のさがとぞわれは聞つる

○うぐひすのは、浮気うはきなど云意にかけたるなるべし。ウキ浮気なる人の、此方のはぬをかこちて、なくといふ事は、さやうな事は、もとよりうはきなる人の、あたりまへぞと、我はきく事ぞとなるべし。雲ぬモおにといへる鶯には、少し似つかはしからぬやうなれど、こは女の離れ居てと云意にて、実のうへにのみかけて歌のしたて鶯の方にはか、はらでいへるなるべし。かくて此歌は、女の許にやられたるにてはあらじ。被告たる人は、

女にしたしくて、心あへる人などなるべければ、其人にかくこたへて、やがて女の方へも、ひゝかせられ  
たる意にてもあるべし。

ふみかよはしける女の、こと人にあひぬと聞て、遣しける

平時望朝臣

藤原時光 一本

六六 かくばかりつねなき世とはしりながら人をはるかに何たのみけむ

○かく、打すてられなど、定なき事のある世中ぞとは、兼て知て居つゝ、猶行末はるかには、何しに、君  
を頼しことぞとなり。下雑四「かくばかモウリ別のやすき世中をつねとたのめる我ぞはかなき、とあるも、  
大かた似たり。

男のこざりければ、つかはしける

けるころ、一本又ノ一本  
をの、一本、いとこ 異本一本又ノ一本  
小町かあね

六七 我門の一むらす、きかりかはん君が手なれの駒もこぬかな

○薄を刈て、秣に飼ふべき君が、手馴の駒だにも来ぬ事かな、さてもくつれなき事よとなり。  
末句のてにを  
はは、玉緒六  
の巻、廿五廿六葉に、○ぬかなど擧られて、古今十九「出てゆかむ君をどめんよしなきにとなりの方にはなむひぬかな。後撰十「我門の云々、六帖「我を  
こそとふにうからめ春霞花につけても立よらぬかな。こはしかくあれかした、ねがふ事の、さもえあらぬを、深くなげきていふかな也、此格万葉に多しと  
あり。猶七の巻廿葉の、ぬか、又ぬか  
の糸をも、よく見てさとるべし。

題しらす

枇杷左大臣（八才）

六八 よをうみのありと消ぬるに身にしあればうらむる事ぞ数まさりなかりける 伊勢集

○其方の心のつらきを、われなればうく思ひて、海又一本の泡の消る如く、心もきえぐとなりて居る身なれば、そなたを恨る事は、数限もなき事よとなり。数なかりけるは、海の沫の、つぶくと、数多きによせていへるなり。初句のよは、例の、男女の間をいふなり。

かへし いせ

六九 わたつみとたのめし事の異一本同もあせぬれば我ぞわが身のうらは恨る を家集

○海の如く、深くたのめ給ひし事も、我身をうらと誰か見るべきかはり果たれば、今は、君の方よりは、たゞ我身の憂うき身なる事を、恨侍る事よといふ意なるべし。さて、此返歌の意にて、又よく思へば、上の把歌「よをうみの云々は、伊勢御を、恨給ふにはあらで、世中をうらみ給ふ意にてもあるべし。一ハ首の意は、世中といふ物は、思ふに任せぬ事のみ多き物にて、憂き物と思ひ消たる我身なれば、たゞ世中を恨る事は、数限もなき事よといひて、さて下の意には、彼太政大臣の聲にとられ給ふを、心にもあらぬ事にて、憂く思ふよしをのたまへるなるべし。よりてかへしにも、かけ歌の、沫と消ぬる身にしあれば、といふにあたりて、我ぞわが身のうらは恨る、といはれたるなるべし。

人の許につかはしける 源等朝臣

七〇 東路のさの、ふな橋かけてのみおもひわたるをしるひとのなき

○万葉十四「上野カミノの佐野サノのふなはしとりはなしおやはさくれどわはさかるかへ。二ノ句までは、かけてと

いはん序ながら、此万葉の古歌を思へるなるべし。かけては、心にかけてなり。(九才)

人のもとににつかはしける又ノ一本

紀長谷雄朝臣

六三

ふしてぬる夢路にだにもあはぬ身はなほあさましきうつ、とぞ思ふ

○夢になりとも、思へど、夢にも逢はぬ我身は、其夢をもやはり、かひなき現のやうに思ふといふ意なるべし。恋のならひにて、まづは現にあふ事は、なりがたく、夢はよく見るものなり。然るをこれは、其夢にさへあはれぬ中なれば、夢とは思はれず、やはり難逢アヒカケ、心にまかせぬ、うつ、の如くに思ふといふ也。

女に遣しける

よみ人しらず

六三

天のとをあけぬくといひなして空なきしつるとりの声かな

○此歌は、女の許より帰たる朝に、やりたるなるべし。夜明ヒトしとて、女のなげきたるを、空なきして、我を早く帰したりとかこつなり。天の(九才)戸は、天空ソラをいふなり。空なきは、偽泣ウソナキなり。枕草子雑二又後拾遺「夜をこめて鳥のそら音ははかるともよにあふ坂の関はゆるさじ。六帖」にはとりにあらぬ音にても聞えけん明ぬる事を我なきしかば。明ぬあけぬは、もはや夜が明るくと云たるなるべし。又は、もはや夜が明たりくと云たるにもあるべし。夜が明れば人に知らる、事に及べは、それをいたくなげきたるなるべし。万葉十六「我門に千鳥しばなくおきよくわか一夜づま人にしらゆな、などの意もあるべし。それを、我をかへさんとて、空泣ソラナキをしたりと、かこちてうらむるなり。三ノ句にて其意しらる、なり。

三三 夜もすがらぬれてわびつるから衣あふ坂山に道まどひして

○さまぐとして、逢ふべき方なきに迷ひて、終夜涙に衣の濡る、が千ちわびしとなるべし。あふ坂山に道迷ふとは、行けども不逢アハ、マよしにはあらじ。逢はん方なきをわぶるよしなるべし。又一説は六帖に、「白露にぬれつ、さ夜はふけにけり今はこえなん相坂の関、とあるなどの如くにて、実の相坂関のある所は、山中にて、山かけにて、夜などあるけば、衣のしめりて濡る、所なり。さて此歌にては、人に逢んとて行く道すがら、衣の濡る、事をいへるにもあるべし。又一説、逢はんとて女の許へ忍て、通ひたるに、おだやかに逢はれぬ筋にて、さまぐ心をみだし、思ひまどひたるを、道迷ひしてといふにもあるべし。そはすらぐとやすらかに逢はれぬに、ひまどりて、いろぐさまさまと、心を苦しめ涙をこぼして、やうぐと逢ひはしたれども、夜露にぬれ涙にひぢて、深更まで、大に難義をしつるよ、といふにてもあちるべし。此三説おもぶきは同じくて、いさ、かづ、異なり。とる人の心にまかするなり。

男のちとへにつかはしける又ノ一本

三四 おもへどもあやなしとのみいふなればはるれば異本一本同よるの錦のこ、ちこそすれ

○かくばかり思へども、わけのわからぬやうにのみ、のたまへば、思ふかひもなきこ、ちし侍りて、せん方なき事ぞとなり。あやなしは、俗言に、ワケノタ、又、といふに近し。それを、錦などの文アハ織チの事に、いひなしたるなり。後拾遺非詳「もみち葉は錦と見ゆと聞しかど目もあやにこそけふはなりぬれ、などもいへり。夜の錦は、史記、本紀前漢書、朱伝などの文によりて、いへるなり。古今下、「見る人もなくて散ぬるおく山の紅葉は夜の錦なりけり、などの類なり。」「十一」

女の許に遣しける

六五

おとにのみ聞こし三輪の山よりもすぎの数をば我ぞ見えにま抄しぬる又ノ一本

○抄には、為家抄云、杉の数とは思ふしるしなり。或抄云、音にきく三輪の山は、杉多き所ながら、我思ふしるしの数を、我見せんとなりとあり。これは、木句まじしとある今又末句の、にしとある方にて見れば、我が深く思ふしるしをば、数々に我ぞ君には見せつる、といふ意ならんか。又試にいは、杉を好色にかけて、かくをりく訪ひなどすれば、其方のしるしの杉よりは、我が好色々々しきが、外へも見えたるぞ、といふならんかとも、思はる、なり。されど、杉を好色にかけていへる例、今ふとは思ひ出されは、こは試にいふのみなり。古今俳諧に、「梅花さきての後の身なればやすき物とのみ人のいふらん、とある(十二)など、似たることもあるべければ、猶よく考ふべきなり。

おのれを思ひへだてつるたる心ありと、いへる女の返事に、つかはしける

兼輔朝臣

六三

難波がたかりつむあしのあしづ、のひとへも君をわれやへだつる

○袖中抄云、顯昭云、あしづ、とは、蘆管也。アジツ竹のつ、のことなり。しかれば此歌考後撰證本は、ひとよもきみにとあり。奥義抄云、あしづ、は、あしのよの中に、うすやうのやうにてある物なり。よくうすきものなり。さればあしづ、ばかりのへだても、我心にはなしとよめるなり。私云そのかは、竹にもあり。竹帛といひて、昔それをとりあつめて、ふみをかきけり、その帛の字をば、きぬとよめり。つ、といふべき(十二)やうなし。ひとへといふ、僻書に付て、如此歎とあり。僻案抄には、あしづ、は蘆の中にうす

やうのやうなる物なり。それほど、隔ずとなりとありて、正義も同じく、蘆の筒の中なる、うすやうの如くなる物をいふとぞとあり。猶此あしづ、の事、人々の考もあれども、こと長ければ、追考に記すべし。一首の意は明らかなり。

三七

遠き所にまかりけるみちより、やむことなき事によりて、京へ人つかはしけるついでに、ふみのはしにかきつけて異。侍ける よみ人しらす

わがごとや君もこふらんしら露のおきてもねても袖の異ぞかわかぬ

○君も我が如くに、我を恋給ふ事にや。我は君の恋しさに、かく旅路にて、夜ヨルヒ昼起ても寝ても、袖のかわかぬ事よとなり。三ノ句は、おきてと三二いはん料のみにて、さて末ノ句は、其縁の詞なり。二ノ句を知らずと、うけたるにはあらざるべし。新勅撰雑三「君こふと草葉の露のよと、もにおきてもねてもねこそなかるれ。

あひしりて侍ける人のもとより、久しく異とはずして、いかにぞや、まだり抄きたるや又一本。と、たはぶれて侍ければ

○久しく音信もせずして、其後に、いかなるぞ、いまだ未生て居るかト、戯にいひおこせたる返事に、此歌を遣したるなり。いかにぞやは、俗言にドウジヤソイ、といふに近し。にくさ俗に云、ニに、かくいひやりたるなり。

三八

藤藤ながらへんながらへん  
つらくともあらんとぞ思ふよそにても人よやけぬると聞かまほし聞人と思へば 伊勢集さに

○君がつらきは、死ぬばかりに思へども、猶此ま、にて、存生<sup>イキ</sup>て居んと<sup>千三三</sup>思ひ侍るなり、まだいき  
て居るかなど、にくさをいふ人の、死たりといふ事を、よそながらも、聞かまほしく思ふ故にとなり。  
古今恋五「しでの山ふもとを見てぞ婦にしつらき人よりまづこえじとて。又上恋二に、伊勢御の、まかる所  
しらせず侍ける頃、又あひしりて侍ける男の許より、尋わびて、うせにたるとなん、思ひつるといへりけ  
れば、「思ひ川たえずながる、水のあわのかたがた人にあはで消めや、とあるなども、引合せて見るべし。  
かくて一本には、「よそにても聞んとぞ思ふつらくとも人やいけると思ふ頃かな、とありて、此「つらく  
とも<sup>云</sup>の歌は、なきはよろしかるべくも思はず。

人のもとに、しばくまかりけれど、あひがたく侍ければ、物にかきつけ侍ける<sup>千三三</sup>

在原業平朝臣

がたきけしきのみえ侍れば 又ノ一本

三六

暮ぬとてねてゆくべくもあらなくにたどる<sup>なくくもなほ</sup>もかへるまされり

○かくしばく来てても、つらきもてなしなれば、日が暮たりとて、宿<sup>しゆく</sup>らるべき所にもあらぬに、難義<sup>ナギキ</sup>なが  
らも、暗き道を、たどりくも、帰る方がましぞとなり。たどるくもといふに、いたくわびたる意あり  
て、恨る意をふくめり。

をとこ侍る女を、いとせちにいはせ侍けるを、女いとわりなしと、いはせければ

○もとよりかたらひ居る男のある女へ、媒を以て、甚あながちにいひかけさせ給ひたれば、彼女の  
返事に、それは大に無理事なるよと、いはせたるなり。もとより男のある事を、しりつ<sup>千四三</sup>



せちにいひかけ給ふ故に、わりなしとはいへるなり。

元良のみこ

三〇

わりなしといふこそかつはうれしけれおろかならずと見えぬと思へば

○此方のおろかならぬ心のほどが、其方へ見えなればこそ、わりなしとはいはるれ。さやうにおろかならぬ心と、見られたりと思へば、聞かれ給はぬは、うけれども、心のほどの見えたるは又、うれしくも思はるとなり。かつとは、うきとうれしきとの二つまじはる意なり。末句の見えぬとは、不見(ミエザル) 見られたりと、いはんが如し。此類の見えは、常の見え、聞えなどのとは、遣ひざま異にて、対ふ人に、見らる、意なり。帚木巻に、指くひの女の、容貌のあかぬ所あるを、女の心にも、恥がしく思ふ事をいふ詞。うとき人に見え、面ぶせ馬頭のにや思はんと、はゞかり恥て云々、とい(十四ウ)へるなども同じ。

女のもとより、心ざしのほどをなん、えしらぬといへりければ

藤原おきかせ

三一

我恋をしらんと思はしる人あらはたごのうらにたつらんちくるなみの数をかぞへよ異

○一首の意明らかなり。下恋四「我恋の数もかぞへば天のはらくもりふたがりふる雨のごと。古今序「我恋はよむとも尽じありそ海のはまの真砂はよみつくと。同恋一「するがなる田子の浦波た、ぬ日はあれども君をこひぬ日はなし。

いひか。よはしける女のもとより、なほざりにいふにこそあめれと、いへりければ又ノ一本

## 貫之

六三三

いろならばうつるばかりもそめてましおもふ心しる入のなき 拾遺六帖をえやはみせける(十五才 しる入そなき 家集又ノ一本)

○君を深く思ふ心が、染色にてあらば、物にうつるほどに、染ても見すべけれど、心はさやうにあらはして、見せらる、物ならねば、いかにとも、せん方あらんやとなり。末句拾遺集、六帖、家集、などの方、まさりざまに聞ゆるなり。

物のたうびける女のもとに、文つかはしたりけるに、こ、ちあしとて、返事もせざりければ、又つかはしける

○物のたうびは、物のたまひを、音使にいへるなり。物いひけるといふに同じ。あひしりてある女の許に、といふ意なり。

## 大江朝綱朝臣

六三三

あしひきのやまひはすともふみかよふあとをも見ぬはくるしき物かりけり 又ノ一本を

○病を山にいひかけて、踏通ふ跡といへり。たとひ、病にてありとも、文(十五才)をも見ぬは、苦しきを、返事おこさぬは、つれなき事ぞといふなり。契沖法師云、足曳のやまひとつ、け、ふみ通ふ跡をも見ぬなどいへるは、此女の病は、足の気アツケなるべし。日本紀、私記に、足引は、山行に、足を引故と注せり。万葉に足病とも、足疾とも、かきて、あしひきとよめるに、かなへり。引合せて證すべしと、いはれたり。あしひきといふ詞の意は、私記の説もうけがたけれど、此歌にては、此契沖法師の説、然るべく覚ゆ。此あし引の云とある、此冠辞は、やまひの、やままでかかれり。山井によせたりと思ふは、誤なり。かなた

がへりと、縣居翁いはれたり。

おほつぶねに物のたうびつかはしけるを、さらにき、いれざりければ、つかはしける(十六)

○おほつぶねは、僻案抄云、敦忠中納言の姨、中納言幼くて、よびつけられたる名といふも、無下にうちとけたり。名なくは、棟梁が女ともかくべきに、勅撰の作者に、かくてのせたれば、定りにける名ときこゆ。大納言行成本にも、おほつぶねとあり。又云、清輔朝臣おほつ少将とかけり。不用、口訣と師説なりと抄にも、右の如くのみありて、別に説はなし。契沖法師は、おほつぶねといふ名は、和名抄に、奴の字をやつことも、つぶねともよみたれば、大奴なるべしと、河社に記されたり。今思ふに、奴の字の訓によられたるは、さる事なれども、猶たをやかなる女の称に、大奴といはんも、むげに似つかはしからず。こはもし大局オホキヨの義にて、今世に局頭ツボネヅラなどといふ類にはあらざらん十六か。勅撰の作者に云々とある、僻案抄の御説も、さる事にはあれども、此集は正しく撰あへずして、やめられたるよしなれば、他の正しく、奏覧を経たる撰集の例を似ても、いひがたし。殊に詞書は、皆、作者のみづから、記しおかれたるまゝにて、載せられたる物と見えたり。是も正撰にあらざる故にてもあるべし。さる故に、いといたくうちとけたるさまの事も多くあり。これ此集の例にて、今の世にてはかへりて、古を学はんたよりとなる事も多かり。此事は別記に委しくは記せり。されば此おほつぶねも、常にうちとけてよびならへるまゝに、記されたるにてもあるべし。

貞元抄  
元良みこ

六三

大かたはなぞや我名のをしからん一本むかしのつまと人にかたらん(十七)

○大かたはは、俗言に、一通りナラバ、といふに近し。なぞやは、何シノソノ、何シヂヤソイ、何シノイナ、などいはんが如し。一首の御意は、一ト通りの事ならば、名のたつは厭ふべき事なれども、今は一ト通りの事にはあらず。何のその名のたつ事をも思ふべき。されば我名をはをしますずして、君を昔の妻なりと人に語り、世間へも知らせん。さすれば、君のうけひかぬかひはあるまじと云て、さやうにいたづらに、名のた、んよりは、我がいふ事を聞入れよかし、といふをふくめ給へるなるべし。初二ノ御句の間に、名のたつは、いとふべき事なれどもといふ詞を、加へて見るべし。此類多くある事なり又、一本に、三ノ御句をしからぬとある方にては、一ト通りの事ならば、何とて名のたつ事をしくなかるべき、た、ん名はをしけれども、これは一ト通りの思ひならナセウねば、名をもをしますずに、昔の妻なりと、人にかたらん、と云御意になりて、此方にも上下の御句の間へ、詞を足して、聞く意なり。拾遺雜貫に、「つらからば人にかたらんしきたへの枕かはして一夜寝にきと、とあるに大かた似たり。

返し

おほつおね

## 三三

人はいさわれはなき名のをしければ昔も今もしらずとをいはんなしとこたへん一本

○君は、御名のたつをも、いとひ給はぬとか、それはいかゞあるにか、知侍らねど、我は無名のた、んはをしければ、前々も今もさやうの事はしらずと、いひ侍らんとなり。初句いさは、不知イサなり。詞も比漣へよみてよむべし又末句の意は、君をばさらにしらぬ御方ぞと、いひ侍らんといふにてもあるべし。此歌は古今恋三に、元方とて入れり。然れ共、此集千八にては、返歌なれば、古今集にての意とは、聊違ふ事もあるべし。

かへりこと抄  
返事せざる女のふみを、からうじてえて

よみ人しらす

六三

あと見れば心なぐさはま千鳥いまは声こそきかまほしけれ

○手跡を見れば、心慰むといひかけて、さてもはや、此上は、直に声の聞かまほしきよとなり。文字を鳥の跡ともいへば、彼文をさして、千鳥の足跡の意に、いへるなり。なぐさの涙は、紀伊國、名草ノ郡なり。下三に、「紀の國のなぐさの涙は君なれやことこのいふかひありといふなり。」

おなじところにて、見かはしながら、えあはざりける女に

六四

かはと見てわたらぬ中にながる、はいはで物思ふなみだなりけり（十八）

○かはと見ては、彼者と見てなり。彼は其人ぞとは常に見ながら、実には違ふ事もならず、言葉をもかはさずして、涙のみ流し居る事を、川にそへて、さて渡らぬ中に流るゝものは、此我が涙なるよといへるなり。渡らぬ中は、逢はれぬ中の意にいへるなり。流るゝに、泣るるをかねたるにてもあるべし。六帖近くて「かぎりなく思ふ涙やかはと見てわたりがたくはなりまさるらん。古今三」思へども人目つゝ、みの高ければかはと見ながらえこそわたらね。猶彼者を、河にかけていへるは、大和物語、「ふるさとをかはと見つゝ、もわたるかなふち瀬ありとはうべもいひけり、など猶多かり。」

心ざしありける女に、つかはしける

橘公頼朝臣（十九才）

## 三六

あま雲になき行かりの音にのみき、わたりつ、あふよしもながなし抄

○初二ノ句は、音にのみといはん料の序なり。一首の意は明らかかなり。末句は、抄本にあふよしもなしとあるぞ、よろしき。鳥獸などの声を於登オトといへる事は、上夏に例など引て、いへるが如し。但し、委しくはんには、声を直に音オトといふにはあらず。声とは、鳥獸草木何にても、其物より出る、其本キホをいふなり。音とは、彼方の声の、此方の耳に入る所をいふなり。声は彼方の声なり、音は、其彼方の声を、此方にていふ詞なり。されば、実にわきまふれば、差別はある事なり。是は声音の字によりていふにはあらず。おと、云詞とこゑといふ詞の事を、委しくわきまふるなり。

## 貫之

## 三六

住のえのなみにはもあらねどよと、もに心を君によせわたるかな十九ウ

○初二ノ句は、よと、もに、心をよすといはん料なり。よと、もには、常常タエエス不断といはんが如し。

兵衛につかはしける

よみ人しらず

## 三六

見ぬほどに年のかはればあふことにのいやはる異一本同くとおもほゆるかな

○見ぬほどには、逢見ぬ間になり。弥遥々イにといふに春をかねたり。実に久しく逢はぬやうに覚ゆる事かなとなり。

まかりいで、のち御ふみつかはたまはせしたりければ又ノ一本

○此詞書つかね緒に、「まかり出たるに、御文たまはせたりければ」と直されたるは、さる事ながら、

猶思ふに、こは又の一本に、まかりいで、のち云々とある方、然るべく聞ゆ。歌の意、更衣の退出アケリイ給ひて、すなはちの事とは、聞えざればなり。三十才

中将更衣

六二

けふすぎばしなまし物を夢にてもいづこをはかと君がとはまし

○久しく、御おとづれのなきに、思ひわびて、今日の過なば、死侍るべきものを、もし死侍りて後ならば、かりにても、いづこをあてに、御消息もせさせ給はんぞとなり。三ノ句夢にてもは、仮かりにもなどいはんが如く、はかなき御おとづれも、といはんが如くなるべし。「春のよの夢ばかりなる手枕云々」。「夢ばかりなるあふ事を云々、などの夢といふ詞の類なり。いづこをはかとの、はかといふ言は、そこはかとなくなどいへる、はかに同じく、俗言にアテドといはんが如し。それを、此歌などにては、墓かかにかけたるなり。小大君集「我死なばいづこをはかとたづねてか此世につきぬ事もかたらん。花宴卷「うき身世にやが二干とて消なばたづねても草の原をはとはじと思ふ。浮舟卷、「からをだにうき世の中にとめずはいづこをはかと君もうらみむ。

御返し

延喜御製

六三

うつ、にぞとふべかりける夢とのみまどひしほどやはるけかるらんかりけん異

○かけ歌の、かりにもと云夢といふ詞を、直に夜の夢の意に、とりなさせ給ひて、一首の御意は、申さる、如く、思ひあまりて、夢のやうに、心がくれまどひたりしゆゑに、現うつ心もなく、物も覚えぬやうにて、住ま処かを訪ふべき事をも、弁へずして居たる間が、遥はるかに長き間にてありしか、現にこそ訪ふべきにてありし

ものを、あまりの恋しさに、只夢のやうに、心が迷ひてありしゆゑに、訪ふべきをも、訪はざりし事よとなるべし。三十一〇

だいしらす

後醍醐臣 又ノ一本  
藤原ちかぬ

## 六三

ながれてはゆくかたもなし涙川我身のうらやかぎりなるらん

○思ふ人のつれなきを、常々泣てのみ居て、川の如く、涙を流せども、此涙川は、流て行く方もなし。憂い我身が即チ浦にて、涙川の流入る、限なるやらんといふなるべし。我身のうらは、我身を憂きといひかけたるなり。古今二「みるめなき我身をうらとしらねばやかれなで海人の足たゆく来る。昔家万葉「わびわたる我身のうらとなれ、ばや恋しき人のしきなみにたつ。

はり罪  
ありはらのむねやな

## 六四

我恋のかすにしとらば白たへのはまの真砂もつきぬべらなり

○浜の真砂の数々も、我恋る数にとらば、足らじとなり。古今序「我恋は三十一〇よむともつきじありそ海のはまのまさ二はよみ尽すとも。白たへは、白栲にて、栲は、荒栲(アラタ)、和栲(ワ)、布帛(フ)の白きをいふ事なるを、妙の字にかはるかくさまに、真砂、或は、花雪などにもいふは、たゞ白き物をば、白妙といふ事の如くうつりたるなり。

つらゆき



六五

なみだにも思ひし又ノ一本のきゆるものならばいとかくむねはれざこがれざらまし

○意明らかなり。古今恋二に「君恋る涙しなくはから衣むねのあたりは色もえなまし、とあるとは意表裏なり。

六六

しるしなき思ひやなぞもあしたんづの音になくまでもにあはずわびしつ、又ノ一本き

坂上是則

○我が思ひのしるしのなきは、いかなる事ぞと、声をあげてなくほどニ于ニまに、人に不逢アハ、エして、わびしき事よとなり。かくて、此歌、啼くものは多かるに、葦田鶴アヅクツとしもいはれたるは、やうあるべく思ひて、考ふるに、もしや、思ひやのひやと云詞、田鶴の声に、よせたるには、あらざらんか。されど、こは、試にいふなりと、麴磨いへり。此歌末句は、例の変格なり。二ノ句の、なぞは、とにてうけたれば、なぞの辞、末句まではか、らざればなり。古今恋二「人しれぬ思ひやなぞとあし垣のまぢかけれどもあふよしのなき。又縣居翁は、古今の、人しれぬの歌も、思ひやなぞとありしか。此もは万葉に多く、助詞なるを、後世人は、心得ねば、誤しと見ゆと、いはれ、鈴屋大人も、古今のは、もの誤なるべしといはれたり。まことに、古今の歌は、とにては、と、のはざるさまに聞ゆれども、此歌にては、とにてもありぬべく、思はる、なり。三十二二

とし久月又ノ一本しくかよはし侍ける人に、つかはしける

○かよはしとは、文の事なるべし。

六五七

玉の緒のたえてみじかき命もてとし月長き恋もするかな

○一首の意明らかかり。

貫之

だいしらず

平定文

六四八

我のみやもえてきえなんよと、もに思ひもならぬふじのねのこと

○我ばかり常々、思ひにもえて、終にも死果るにてやあらんとなり。富士の嶺の火は、鳴とゞろく物なるを、我は、鳴らぬ富士の火の如くとなり。不鳴を、恋の不成就に云かけたるは、論なし。古今雜錄「ふじのねのならぬ思ひにもえはもえ神だにけたぬむなし烟を。(二十三オ)

返し

きのめのと

六四九

ふじのねのもえわたるともいかゞせんけちこそしらね水ならぬ身は

○富士の嶺の如く、燃わたり給ふとも、いかゞし侍らん、せん方も侍らず。我はそれを、消すべき、為方(シカタ)は知侍らす。水にてなき身なればとなり。さて富士のねなどのねは、嶺の、ねと同音にて、山の高き峯頭の事なり。根の字をも書くは、假字なり。此根字などに迷ひて、麓の事と心得るは、非なり。

こゝろざせる女の、家のあたりにまかりて、いひいれ侍ける

貫之

空の わびわたる我身は露をおなじくは君がかきねの草にきえなん

○かく逢がたきをわびて、月日を過す我身は、露の如く、はかなき身な(二十三)るものを、とても消ゆるならば、君があたりの草にてこそと思ひて、かく近く来つるぞとなり。たゞ逢がたきのみにはあらで、女のつれなきを、恨る意と聞えたり。新勅撰恋四「もろくともいざ白露に身をなして君があたりの草に消なん。

だいしらす

在原元方

空一

みるめかるなきさやいづこあふごなみ立よるかたもしらぬ我身はなき我身かな 又一本

○思ふ人を、ほのかにだにも見るべき所は、いづくぞや。絶て逢期アソコの無ナさに、もし此あたりなどで、あふ事もやと、立よるべき方をも不知我身シラヌはとなり。久しく逢瀬のたえたれば、今はかりそめに、相見んと立よらん、所だにしられずなりぬる事よ、といふなり。四ノ句は、方に、湯カを、かけたなり。古今恋三「あふ事のなきさにしよる波なればうら(二十四)みてのみぞ立かへりける。新古今恋一、又伊「みるめかるかたやいづくぞ棹さして我にをしへよ海士の釣舟。

東宮に、なると、いふと人所のもの忍ひて物申けるに一本に、女おひてのものにのいひける時にに、おやの戸をさして、ゐていにければ、又のあしたに、つかはしけるおしたて、 又一本

○東宮は、春宮とも書く。職原抄に、東宮、春宮、是一也とありて、共に、ミコノミヤ、と訓み、常には、東宮の字音のま、に、トウグウとも称少ふ。共に皇太子の御事、又皇太子の、おはします宮をも申なり。但縣居翁も、皇太子のおはせる宮をさして申時は、春と書、御身の上を申せば、東宮

と書事、後世のならばせなり、といはれたるが如く、中昔以後の物に見えたる、皆此定なり。然れば、此所も、春宮とあるべく覚ゆれども、此集は、猶此定に三十四か、はられざりけるにもあるべし。なるとは、鳴戸なりと抄に見えたり。ゐては、將ツルてなり。率ツルる事を、みといふは常なり。桐壺卷、源氏君の相を見せんとて右大弁の從御うしろみだちてつかうまつる、右大弁の子のやうに思はせて、ゐて奉る、など猶これかれに多かり。

重光一本  
藤原滋幹

## 三五

なるとよりさしただされし舟よりもわれぞよるべもなき心してせし異

する又一本

○鳴戸を、阿波の鳴門によせていへり。阿波の鳴門よりさし出されたる舟の、海上の灘ナタに、よるべなかつたよへるよりも、甚しく、彼春宮の鳴戸より、我をさし出して、君を率率て入られしかば、我ぞよる方なきこ、ちして、いたく悲しかりしとなり。忠見集、女の許に行て、物いふ三十五に、雨のいみじうふれば、いとくらくて、えも見えぬに、夜なかばかりに、戸を引たて、いりぬれば、「音にきくなるとのものとにかづきする海人よわびしきめを見するかな。

だいしらす

よみ人も抄一本同しらす

## 三六

高砂のみねのしら雲か、りける人のこゝろをたのみけるかな

○二ノ句までは序なり。されど白雲の如く、かやうに、うきたる人の心を、と云フ意を、ふくめたるものと見えたり。人の心のうつろひがたになりたるなどを、恨てよめるなるべし。

長明のみこの、母の更衣、さとに侍ける。時異に、つかはしける

○更衣は、女御の次の女官なり。しかるべき、上達部の女などにて相当四位なり。仁明天皇の御時より、初れるよしなど、河海二十五抄御製に委し。此更衣、また、長明親王の御事は、大日本史にも、藤原淑姫、参議菅根女也、為更衣、叙四位上、生長明親王、兼明親王、と見えたり。

延喜御製

空

よそののみまつぞはかなき住のえのゆきてさへこそ見まくほしけれ

○かく隔タテてのみ待居るは、甚はかなきを、此方より行ても、逢見まほしき事よと、のたまはするなり。

もとより、更衣の里邸などへ、行幸なるべき事ならねば、ゆきてさへこそこのたまはするは、いといたく切におもほしめすよしなり。猶思ふに、もしは、古今恋五よみ人不知「久しくもなりにけるかな住吉のまつはくるしきものにぞ有ける、といふを、本歌にて、よませ給へるにやあらん。さらでは、住のえのと云御三十六詞、二ノ御句の、まつ縁ながら、いさ、か、用薄きやうに思はる、なり。かくて又、契冲法師の書入られたるには、万葉七に「住のえにゆくちふ道云々、今の歌と、合せ思ふに、行といふ地名、住吉にあるか。奥にある、戒仙法師の歌も、可考と見えたり。

題しらず

等朝臣

空

かげるふにみしばかりにや浜千鳥はなちり鳥ゆくへもしらぬ恋にまどはん一本又奥義抄

○抄に、為家卿抄云、かげるふ程に、ほのかに見しなり。非ス蜻蛉ニ云々。はま千鳥は、行へもしらぬといは

枕詞なり。為家卿の本に、放鳥ハナトリとあるも同じ枕詞なり。放鳥は、万葉の詞、放ちし鳥なりとあり、此説の如し。四ノ句恋の上にては、俗言にいはば、アテモノ行末いかにあらんも、知られぬといふ事なるべし。一首の意は、かげろふの如くに、ほのか二十六ウに見たるは、いとほかなき事なるを、かくほのかに見たるのみよりして、深き思ひとなりて、終にはいかにならんとも知られぬ恋に、迷ふにてやあらんとなるべし。又二ノ句は、いとほのかに、逢見たる事をいふにてもあるべし。下恋四「かげろふのほめきつれば夕暮の夢かとのみぞ身をたどりつる。浜千鳥は、行方ユラヘもしらぬといはん料なり。古今雜下「忘られん時しのべとて浜千鳥ゆくへもしらぬ跡をとむる、興風集「霜のうへに跡ふみとむる浜千鳥ゆくへもなしと音をのみぞなく、など猶あり。然れども、又思ふに、浜千鳥とよみたるは、まづは跡云々とあり。此歌にてはたゞ行方もしらぬといふのみの用なれば、浜千鳥よりは、放鳥の方にやと思はる。かくて万葉二に「鳥宮池上有放鳥イケノツナルハナトリあらびなゆきそ君まさずとも、とあるは、水鳥の二十七翅など切て、放ち飼ふをいへりと、聞ゆれども、此歌にては、たゞ手を放ちハナトリやる意と見るべきなり。されば、奥義抄にも、はなち鳥とは、ごに入れてかふとりを、はなちたるをいふなり。いづちかゆくらん、しらねは、ゆくへしらぬ事によむなりと有て、六帖鳥の如にも、「はなちどり行へもしらぬればはなれし事ぞくやしかりける、などもあれば、行へもしらぬとのみいはん料には、放鳥の方つぎくしく覚ゆるなり。かげろふは、冠辞考に、万葉卷六に、炎カキヒ乃春尔ノハルニシレバ之成者、このかきろひは、春の空に糸の如く、かげろひつ、見ゆる物をいふ。さて、是ぞ実にうらくと、晴たる春の天のさまなれば、専ら春に、冠らせていふならん。されば、此語の本は、火かげのきらめくより出て、かのそらに遊べる糸などは、譬て、かきろひといふなり。実の火影をいへる二十七は、古事記に、覆中天皇難波より、大和へ、いてます道にて、かきろひイノモユルイヘムラ加蘇漏肥能毛由流伊弊牟良、都麻賀伊弊能阿多理、へり見し給ふに、難波の宮に、火のつきたるを。

空天

わたつみのそのありかはしりながらかつぎていらん浪のまぞなき

万葉二に、香切火之燎流荒野尔、また、蜻蛉火之燎流荒野尔云々、などあり。且この加藝漏肥、香切火、などよめるに依て、かげろふ火てふ事なるを、ふを略きて、かぎろひといへるなるべし。さて此詞、万葉には、仮字にて書しなれば、右の古事記に依て、加藝漏肥能とよめり。さるを中頃よりは、かげろふのといへるも、ろふべき歟。卷二下、謹火焼どもてふ事を、安之布多氣、膝母とよめるも、肥と、布を、通はしたればなり。○卷八に、蜻蛉、髣髴所見而、別去者、卷十二にも、玉蜻、髣髴所見而、往見故尔、云々などよめるは、火かげの、かすかに見えたるに譬ふ。この蜻蛉、玉蜻など○卷一に、玉蜻、夕去来者、卷十に、玉蜻、夕去来者、卷十三に、往影乃、月文経往者、玉蜻、日文累、念戸鴨云々。これらは、日の気のきらめくを二十八といへり。夕日はことに、火かげの如くなれば譬へつ。○卷二に、玉蜻、磐垣淵之云々、こは、石を打ば火の出る故に、磐とはつゞけたりと見ゆ。又卷十に、玉蜻、直一目耳視之人故尔てふも、石の火の如くかつぐ見えし意か。又常の火にても、ふとかげろひたらんは、かくもいふべし云々。○蜻蛉を、蜻火と書は、赤卒が飛を、火の如く見なして、かぎろひといへるなるべし。さて、古事記に、宮に火つきたるをも、かぎろひといへるに依に、其本は、火なり。然れば、蜻蛉を、かげろふ火と見なしけんは、後なれど、そも又、はやき時の語なる故に、万葉には、蜻蛉の訓をかりたるも有なるべし、云々と見えたり。か、れば此歌も、炎の如くほのかにといふ意にて、こは枕詞を、やがて用ひたるに同じ。此事は、上夏部に、二十八と委しくいへり。

あるところ(抄本ナシ)はしりながら、えあふまじかりける人に、つかはしける

藤原兼茂朝臣

○海人の潜カヅキするによせて、其方の在所は知て居つソナクも、行て逢ふべき、人間のなき事よといふなり。海  
の底に、其方ソコ、女をかけたるなり。浪の間は、人目の間をたとへていへるなり。

女のもとにつかはしける

橘実利朝臣

倭一本

つらしとも思ひぞはてぬ涙川ながれて人をたのむこゝろは身なれば又一本

○君は今、甚つられれども、それをつらしとも、え思ひ果はせぬことよ。それは何故なれば、今はかくつ  
られれども、長経ナガサて行末長く、恋渡る二十九まならば、もしつらき心のやはらぐるもやと、たのむ心な  
ればとなり。涙川は、うき恋に常々涙を流す意にて、さてながれてといはん料とせるなり。新古今恋一「つ  
られれどうらみむとはたおもほえず猶行さきをたのむ心に。

かへし

よみひとしらず

三

ながれてと何たのむらむ涙川影見ゆべくもおもほへなくに

○さやうに、行末をば何しに頼給ふらん。いつまで過たりとも、君の涙川に、此方の影を、うつして見ら  
れんとも思はぬにといふなり。四句は、涙川の為立シタにて、影見ゆべくもといへるなり。意のみを、引つゝ  
めていはゞ、いつを待給ひても、親しく逢ふやうの事は、いふにも及ばず、いさ、か影形をも見せ奉らじ  
と思ふに、何とて末をばたのみ二十九ウ給ふらんと、いといたくつれなきさまにいへるなり。人に見らる  
る事を、見ゆ見えといへるは、源氏君のとかくのたまふ時に、空野君の心をいへる所、いとたくひなき御ありさまの、いよくう  
ちとけ聞えん事の、わびしければ、すくよかに、心づきなしとは見え見也、奉るとも、さるかたのいふか



なきにて過してんと思ひて、つれなくのみもてなしたりなどもあり。上十四葉にも此詞ありて、そこにいへるをも見合すべし。

人をいひわづらひて、つかはしける

※つかね緒、おほつぶねを、いひわづらひて遣しける。

平定文

六五九

いつ方異  
なに事を今はたのまんちはやぶる神もたすけぬ我身なりけり

○かくまでも君のつれなきものかな。いかなるわざをか今は頼にはせん。君の心のやはらぐやうにと、種々に祈りなどすれども、其しる三十三しもなければ、さては、我身をば神もたすけず、見すて給ひたるよなどいふなり。猶思ふに、神もたすけぬといふに、人のつれなければ、今は世にながらふべくもあらずといふ意をも、ふくめたるならんか。万葉四「あめつちの神もたすけよ草枕旅ゆく君が家にいたるまで。

かへし

在原種梁女 又ノ一本  
おほつぶね の一本又ノ一本

六六〇

ちはやふる神もみ、こそなれぬにけれらしさまぐいのるとしもへぬれば

○さまぐいの事を祈給ふは、年久しき事なれば、神も耳なれ給ひて、めづらしげなくおもほすにてあらん。それゆゑに、たすけ給はぬなるべしとなり。さまぐいのるといふに、是まであだくしき事どもをいのり給ひしと、いひなす意こもれり。猶此かけ歌の作者、定文朝臣の河三十三海抄総角引歌、「ちかひつる事のあまたになりぬれば千々のやしるも耳なれぬらん。

女のもとにまかりたりけるを、たゞにてかへし侍ければ、いひいれ侍ける

## 貫之

六二

うらみても身こそつらけれから衣きていたづらに返とおもへば

返ると又ノ一本

○わざ／＼訪ひ来ても、逢はずして、かくいたづらに帰ると思へば、人を恨るにつけても、まづ我が此身の、いひがひなきが、つらき身ぞと思はるとなり。末句は、諸本に、返と、書たるも、皆帰ると、読べき事と見えたり。此歌にては、返すといふべくはあらず。又返すとよむべくは、必ず文字を入れて、書くべければなり。一首衣を以てしたてたるなれば、うらみ、身こそ、きて、かへる、など、縁語なる事は論なし。三十一オ

あひしりて侍ける人を、ひさしうとはずして、まかりたりければ、門より返しつかはしけるに

※つかね緒云、あひしりて侍ける人の許に、久しうとはずして、まかりたりけるに、門よりかへしければ

## 壬生忠峯

六三

すみのえの松に立よるしら浪のかへるをりにやねはなかるらむ

か、れる 又ノ一本

時にやねをばなくらん 六帖

○住吉の岸の松に、波の打よせて、其波の引て帰るをりに、松の根は流るゝにてやあらんといふを表にて、かく立よりても、いたづらに帰る時に人のつれなさの思ひしられて、音は泣るといふなり。一首を、住吉の松と波とにて為立たる故、四ノ句、にやといひ、末句に、らんとはいへるなり。又云、六帖の方と、引合せて考ふれば、住吉に、我が通ひすむ事をかけ、松に、女の待事をかけて、一首の意は、久しきとだえをうらみて、かく心強く門より帰し給へど、さても我が帰る時(三十一オ)には、君もさすがに、音は泣るゝ

にてやあらん、と云にてもあるべし。伊勢物語「大よどのまつはつらくもあらなくにうらみでのみもかへる波かな。

をとこのもとより、いまはこと人あんなりと又ノ一本あんなればと、いへりければ、女にかはりて

小野宮左大臣 又ノ一本  
よみ人しらす

○こは男の許より、其許そこへは、我ならぬ、他の男の通ふがあるなれば、今よりは我は訪はぬぞと、

云おこせたる返事によめるなり。此贈答、元輔集には、時々まかる女に、こと人まかると聞て、「う

きながらさすがに物の悲しきは今はかぎりと思ふなりけり、とて遣したりければ、「思はんと云々、

またつかはす、「春日野の云々」とあり。(三十二オ)

六三

思はんとたのめし事もある物をう抄なき名をたて、たゞにわすられよとや一本わすれぬ元輔集

○君は、末長く、心変らずに思はんとたたまひて、我に頼ましめ給ひし事もあるものを、それを今となり

て、他の男がある故になど、我に無き名をたて給ふは、あまりなる御心なり。たとひ絶給ふとも、せめ

ては我に、無き名をば立すして、たゞありのまゝに、忘れ給へかしとなり。

かへし

六四

春日野のとぶ火の野もり見し物をそと元輔集なき名。といは、つみもこそうれ

○古歌古今「春日野の飛火の野守出て見よいまいくかありて若菜つみてん、と云たる、其春日野の飛火の野守が、たしかに見たるものを、無しといは、是はいかにと、若菜を摘つまもこそ得れといひて、さて三

十二 君が許に、他人のいひ通ふがある事は、たしかなる事なるものを、さる事はなし、無名なりなど偽給はゞ、罪を得給ふにてこそあらめ。それはいとゆゑ、しき事ぞといふなり。女の歌に、なき名はたてゞと、云たるにあたりて、無き名にはあらずと云を、若菜を表にして為立たるなり。縣居大人も、此歌「春日野の飛火の野守出て見よ」の歌を取て、若菜といふ事はなけれども、なき名といふに、心を持たせて云たるなりといはれたり。猶思ふに、下ノ句の詞の勢ひにては、罪を得んとはいへども、下の心にはいよく無名ぞと争はゞ、證據をも出さんと、いふほどの、強き意をふくめるやうにも聞ゆるなり。無き名といふを、無業にかけたるは、拾遺雜春「春日野の萩のやけはらあさるとも見えぬなき名をおふすなるかな。日春

野の中を、飛火野ともいふは、打聴に、飛(三十三才)火野は、春日野の内にあり。和朝五年の紀に、始て春日野の峰(トブヒ)をおかれし事あり。それより其わたりを飛火野といふなりとあるが如し。

## 題しらす

## 六五

わすられておもふなげきのしげるをや身をはづかしの杜といふらん

○人にかくわすられて、其事をくよくよとのみ思ふ、此なげきのしげるは、甚恥かしき事なり。さて、羽東師ゾカシの森と云て、木の茂き所の有ときくは、かやうな身の事を、いふにてやあらんとなり。統拾遺後成「もらしても袖やしをれん数ならぬ身をはづかしの森のしづくは。森は、字書に、木多貌とあり。新撰字鏡には、森、木ノ長貌とも見えて、万葉十に、「朝なく我が見る柳鶯の來てなくべく森にはやなれ、などもあり。羽東師杜は、山城国、乙訓郡なり。神名帳に、羽東師坐タカミサヒ、高御産日ノ神社と見え、和名抄にも、乙訓郡に、羽東波立と見えたり。かくて、此杜を三十三よめるは、此歌などやはじめならん。

六六

人の心の。かはりにければたりければ 又一本

右近

思わすれじとはんとたのめし人はありとさくいひしことのはいづちい行一本にけむ

○深く思はんと、我に令ツク頼給ひし人は、無事ブツにておはすと聞くなるが、其のたまひし御詞は、何方へ行たるにか、実に其御詞のなごりも、無くなりたる事よとなり。此歌、大和物語二に、季繩の少将のむすめ右近、故后宮にさふらひける頃、故権中納言牧忠朝のきみ、おはしける。たのめ給ふ事など有けり。宮に参る事たえて、さとにありけるに、さらにとひ給はざりけり。内わたりの人來たりけるに、いかにぞ參給ふやと、ひければ、常にさふらひ給ふといひければ、御文奉る、「忘れじとたのめし人は云々、と見えたり。さて、かくさまによめる、あり三十四の意は、存在の義にて、存在て在在とさくにと、いはんが如し。古今、旅「名にしおはいざこと、はんみやこ鳥わが思ふ人はありやなしやと、など皆同じ。

さだくにの朝臣のみやす所と抄。、きよかげの朝臣と、みちのくに、ある所々をつくして、歌によみかはして、今はよむべきところなしといひければ

※つかね緒云、定国朝臣の御やす所と、みちの国にあるところくをつく歌によみかはしたりけるに、今はよむべき所なしといひければ。

○此御息所は、泉ノ大将定国卿の女、和香子と聞えて、延喜三年に、女御になり給へるよしなり。御息所は、ミヤサンドコ源氏物語玉の小櫛に云、此物語の例を以て考ふるに、細流に注せられたる如く、御子をうみ奉り給へば、御息所と申せり。さてそは、女御更衣などの外に、別に此品あるにはあらず、女御更三十四ウ衣などにわたれり云々。又竹川卷に、鬚黒ノ大臣の姫君、冷泉院に参り給ひて、懐妊のほどにも、御息所と有。然れば、御子いまだ生れ給はねども、すでに妊み給へば、申せるに

こそと見えたり。

古今集の詞書に、二條后の、東宮の御息所と聞えける時、とあるをも、遠鏡に、東宮の御母様と、訳されたるなり。又正明は、御息所とは打まがせては、女御をいふ事なり。されど、更衣をいひ、伊勢御などの如く、たゞの女房にても、帝に御（メサ）るれば、御息所といふなり。又東宮の御そひかをも、いへり。又御位をさらせ給ひて、院と申やうにならせ給ひて、後に参らせ給ふ姫君も、御息所といふなり。真淵翁、本居先生などの説は然れり。御子の有無にか、はりたる事にてはあらずといへり。此説たしかなる拠ありや。聞もかくて、此詞書なるは、定国朝臣の女の御息所といふ事なり。

古今集に、東宮の御息所とあると、みち

の国は、陸奥国なり。打聴に、陸奥は、歌にもよむ如く、美知乃久にて、和名抄には、美知乃於久とありて、道之奥といふ意な（三十五オ）れば、下に国とそへていふ時は、美知乃久乃久尔なり。然るを、中昔の物語書などには、みちの国とのみいへるは、みちのくのくにといひては、乃久といふことの重なりて、わづらはしきま、に、乃久をはぶきて、いひならへるなるべし、とあるが如し。  
近世にむつの国ともいふみちの国にある所々を尽して云々とは、此国の名所のあるかぎりをも、かたみよみかははし給へるなり。かくて御息所、籬島の一所残りてあるを、忘れ給ひて、もはや名所はなしとのたまひたるなり。

源清蔭朝臣景一本

六七

さても猶またまがきの島のありければ立よりぬべくおもほゆるかな

○抄に、籬のもとへは、立よる物なれば、籬島といふにつけて、御息所の（三十五ウ）もとへ、立よらんと心をよめるなるべし。懸想の歌なりとあるが如く、筥のもとに立よるは、恋のしわざなれば、恋の部に入たるものならんか。又思ふに、たゞ国の名所を見巡るにいひなして、此筥島一所を残したれば、猶立より見るべき事と覚ゆといふを、表にて、さて裏の意は、御息所の、今はよむべき所なし、とのたまへるに答へて、さてもいまだ此一所をのこしたるは、歌によむべき事に思はれ侍りと、いふのみにて、御息所は、国ノ中に残したる所はなしとおぼしたるに、猶ありしを思ひよりたるを、ほこりたるのみの意にて、雑の

歌にてもあるべし。下ノ句の立よりぬべく云々といへるに、うはべはなだらかに云て、かへりて下の心には、ほこる意もあればなり。かくさまに、うへをなだらかに云て、かへりて下の心。強くなる事。今世の俗言の上にも、常にある事なり。此歌を、大かた（三十六）の男女のならんには、恋の意をかけたりと見んも、然るべき事なれども、御息所との贈答なれば、たとひ下には其意ありとも、打出して恋の意なりとは、いひがたかるべきさまなるを、恋の部にしも入れられたるは、ゆゑある事にか。又た、歌のさま、恋とも聞ゆれば、ふと入れられたるものか、今はしりがたし。重之集、「白波の笹の島に立よれば海人こそつねにたれと、がむれ。籬島は、陸奥なる事は、此歌の詞書にてもしるし。猶古今廿、みちのく歌にも、「我せこそ都にやりて塩がまの笹の島のまつぞくるしき、ともあり。

こと女のふみを、めのみんといひけるに、まうしければ、見せ侍けるを聞て、又一本みせざりければ、うらみけるに、そのふみのうらにかきつけてつかはしける

○是は他の女の許より、此作者の許へ、おこせたる文を、妻なる三十六女の、見せよといひたるを、男のみせざりし故に、妻のそれを恨たれば、然らばみせんとて、左の歌を、文の裏に書て、見せたりとなり。此詞書、又の一本にては、おもおき違へり。そは、歌の下にいふべし。異本には、こと女のふみを、めの見んといひけるに、見せ侍らすとて、うらみければ云々とあり。又の一本には、こと人のふみを見んと、女の申ければ、見せざりければ、うらみけるに云々とありて、いさ、かつ、の違はあれども、意は大に異らすして、此方ことに、まされりと云にもあらず。

よみ人しらす

六六八 みこれはかくうらみ所もなきものをうしろめたくはおもはざるらむ らんん 異本一本 又ノ一本

○うしろめたきは、ウシロメ後安きの反対にて、ウツラ俗言に、ウツカヒナ氣ツカヒナ、また、ウアンシン不安心ナ、など云に近し。此文は此通りに、何の子細もなく、目をとめて見るべきふしもなきものを、何かゆゑもある文か何ぞのやうに、





かざるなれば、則あひ見ざるは、いつよりぞと、数ふる程に、久しきとだへは、我が為たるにあたるなり。よりにて、かく数ふるほどになさんとは、思ひもかけざりし事よと云意なり。されと、抄本、又拾遺、恋四伊勢にも、伊勢家集にも、二三ノ句、いさか違へる。末句、ならんものとはとあり。また、信明集と、又ノ一本には、詞書、二三日はかり、あはぬ女にとありて、二三ノ句、あひ見ぬほどを、いつなりと、いつなりあるべし。山ノ歌にても末句、ならん物とはとあり。か、れば、多きによりて、ならんの方を用ひんも、然るべし。一首の聞えも、おだやかなればなり。又一本には、詞書、きさらぎばかり、あはざりける女の許へ、つかはしけるとあれども、歌と合せて思ふに、此詞書三十八ノ句は、よくもかなはず、信明集の詞書も、同じくよくもかなはぬさまなり。こは、久しう云々といふにしたがふべし。

だいしらす

藤原治方 存又ノ一本

空

よのつねの音をしなかねばあふ事のなみだのいろもことにぞ有ける

○逢事の無き故に、音のみ泣く事なるが、それは尋常の涕泣さまにはあらで、甚いたくなく事なれば、流出る涙の色も、格別にて、皆血の涙にてあるよな、と云なり。三四ノ句は、逢事の無きゆゑに、ふを、涙にいひかけたるなり。末句は、涙の紅なるを見て、さては尋常の音をなかねば、か、ると、自身心のつきたるが如くに、いへるなり。

空

白浪のよするいそまをこぐ舟のかちとりあへぬ恋もするかな

大伴黒主 三十九才

○抄に、序歌なり。いそまは、磯間なり。取もあへず、思ひそめしといはんの、上ノ句なりとあるが如く、上ノ句は、とりあへぬといはん料の序にて、とりあへぬとは、ふとうちつけに、人を恋そめて、それより恋の思ひをするをいふならんか。然れども、かく見る時は、四ノ句の中間ナカラと迄、序となるなり。かく一句につゝきたる詞を、中間にて切て、以上を序にしたる歌は、例もあるまじきやうなり。よりて考ふるに、こは、四ノ句の終取あへまで、序にて、梶取あへぬ如く、暇なき恋をもする事かな、といふ意の方ならんか。猶いはゞ、万葉十七に、和歌二首、大伴宿禰家持とて、二首ありて、第二首目なり。「白浪のよするいそまをこぐ舟のかちとる間なくおもほえし君、といふ歌ありて、左注に、右以天平十八年八月、掾大伴宿禰池三十九主、附大帳使、赴向京師、云々此時也。復漁父之船入レ海浮レ瀾、爰大伴宿禰家持、寄情二眺、聊裁三所心」と見えて、意は四ノ句まで序にて、梶取あへざるが如く、間も無く思ひし君なりと云て、今かく逢ふは、よろこばしき事といふなり。本集の歌は、もしは此万葉の歌の、異なる伝へにはあらざるか。作者の名は、此万葉によりて、池主と誤り、それを又、大伴とあるより、さかしらに、黒主と写誤たるにもあるべし。二ノ句、いそ間を、抄に、磯間なりとあるはわるし。こは磯回ツの意にて、浦わ、島回な磯のめぐれる内をいふ事、万葉に多くある詞なり。これらは、序の中の詞にて、歌の意にはあづからざれども、抄の説の誤れるに、人の迷はん事を思へば、いさ、かわきまへおくなり。

源うかぶ(四十七)

## 六三

恋しさはねぬになぐさむともなきを異にあやくあはぬめをも見るかな

○寝ずに居れば、恋しさの、なぐさむといふにてもなきものを、あやく我は、目をも合せず、熱くも得

いねずにのみ居る事かなとなり。実は、人を恋る思ひも、睡たる間は、忘る、物なれど、思ひの切なるに  
よりにて、得睡も寝ずにのみ、すくよかに起居るを、たけき事とするやうなるを、うちかへして、かくはい  
ひなされたるなるべし。あはぬめは、歌の表にては、不<sup>アハ</sup>合<sup>ハ</sup>眼<sup>メ</sup>にて、まどろみだにせぬ事なり。それを、  
人に不<sup>アハ</sup>合<sup>ハ</sup>目<sup>メ</sup>にいひかけたるなり。此裏の意の、不<sup>アハ</sup>合<sup>ハ</sup>目<sup>メ</sup>のめは、うきめ、からき目、などのめに同じ。

としへていひわたり侍ける女に

源 <sup>俊</sup>すぐる <sup>又ノ一本</sup> (四十二)

空三 久しくもこひわたるかな住のえのきしに年ふる松ならなくに <sup>よりもけに</sup> 又ノ一本

○抄に、住吉の松は、久しき物なれば、久しくも恋わたるといはんとてなるべしとあり。此意はさらにも  
いはず、猶思ふに、恋わたるとは、はじめ恋初てより、同じさまに、変らず恋るをいふ詞なれば、松の色  
の、いつも変らざるによせたる意もあらんか。古今、雜上「我見ても久しくなりぬ住吉のきしの姫松いく  
代経ぬらん。拾遺、恋二「すみのえの松ならねども久しくも君とねぬよのなりにけるかな。

藤原清正

六四 だいららず <sup>を</sup> あふ事 <sup>に</sup> のよ、をへだつるくれ竹のふしのかずなき恋もするかな <sup>公忠集</sup>

○多くの夜々を隔て、逢ふ事なれば、其間に恋しくのみ思ふ事の、数もしられぬ、恋をもする事かなと  
いふを、竹の節間を隔て、節の数(四十一)まなきといふを、臥事の数少きといふに、よせたるなるへし。又  
思ふに、此意と見る時は、ふしの数なきといふ事、臥事の少きと、恋しき事の数々なると、二かたにか、

りて、穏かならぬさまなれば、是はたゞ、節の数少きを、臥事のすくなきによせたるのみにて、恋しき事の、数限なき事へは、かゝらざるにてもあらんか。此歌、公忠集には、女の許にと詞書あり。

かれがたになりける人に、すゑもみぢたる枝につけて、つかはしける

○すゑもみぢたるとは、一枝にて、末の方は、紅葉し、本の方は青葉なる枝の事と聞ゆ。

よみ人しらす(四十二)

六五

今思ひはてふ心異つくはの山見れば思ひこずゑよりこそ色かはりけれ

○もはや厭イヤたり、離カんといふ、御心のつきたる御方を見れば、来給はぬよりして、はや大きに、やうすのかはりたる事に待るよとなり。梢を、不コ来メに云かけたる事、拾遺、恋三「たゝくとて宿のつま戸を明たれば人もこずゑの水鶏なりけり、などに同じ。又、新勅撰、恋五「うつろひし心の花に春かれて人もこずゑに秋風ぞふく、とあるは、本集の歌によられたるにもあるべし。此歌の詞書、又、一本には、かれ方になりける女云に云、とあれども、一首の意をよく味ひ見るに、こは必女の歌なるべく思はるれば、本集の如く、人云とある方、まさりざまなり。筑波山は、常陸国、なり。古今廿、常陸歌に、「つくはねのこのもかのもにかけはあれど君がみかけにます蔭はなし。(四十二)

女のもとよりかへりて、朝まうできてにつかはしける又一本

源重光朝臣道又一本

六六

かへりけむ空もしられずをばすての山より出し月を見しに

○抄に、姨捨は信濃なり。此山にをばを捨て帰りし男、此山の上より出る月を見て、さすがに悲しくて、

「我心なぐさめかねつさらしなや姨捨山にてる月をみてとよみける。此歌古今にあるを、大和物語に、か  
くかけり。歌の心は、女のつれなきに慰めかねて、帰りし空も覚えざりしとなりとあり。其意ならんか。

又或人は、大和物語をおもかげにして、かへりけん云々は、我が帰たる事の、覚もなきよしにて、をば捨  
のといふに、女を置いて別し事を思はせたるなるべし、といへり。此説の方、然るべく思はる、なり。(四十  
二ウ)

兼輔朝臣に、あひはじめて、つねにしもあはざりけるほどに

清正母

空宅  
ふりともせげぬ君が雪兼輔集げのしづくゆさへ袂異にとけぬ氷しにけり

○ふりとげぬは、不フリト降トク遂スなり。不不解解下下ケケススにはあ兼輔卿の、なほざりにして、常にも逢ひ給はぬをたとへ  
たるなり。雪解の雫とは、即涙の事なり。一首の意は、君の通ひ遂げ給ふさまにてもなきそれをなげく涙  
ゆゑに、我袂には、常々氷の解る間もなき事にて待るよとなり。君が雪は降りも遂トクざるに、此方の袂は、  
氷の不解トケザル事よといふなり。異本に、さへとあるにては、意少しかはれども、此方はよろしかるべくも思は  
れず。

かたふたがりけるころ、たがへにまかりありくとてまかるとて、又ノ一本

※つかね緒云、かたふたがりける頃、た  
がへにまかるとて、女に。(四十三才)

○かたふたがりは、方塞カタサガリなり。方角の塞をいふなり。天一神の巡行して、其日に留りて在る方を塞といふなり。天一神は、四方に五日づ、四隅に六日づ、在て、癸巳の日に天上して、十六日あり。此間を天一天上と云て、四方四隅ともに、塞たる方なし。天一神をは、中神ナカノカミとも長神オホカミともいふよし、己酉日良に在、六ヶ日乾、乙卯日震卯に在、五ヶ日離、庚申日巽に在、六ヶ日鳥、丙寅日離午に在、五ヶ日離、辛未日坤に在、六ヶ日巽、丁丑日兌酉に在、五ヶ日馬、壬午日乾に在、六ヶ日竜、戊子日坎子に在、五ヶ日鳥、自癸巳至于戊申、十六日天上に在、など委く、河海抄に見えたり。方違カタガへとは、此塞である方へ向て往く事を怠怠て、他の方へ行く事なり。たとへば、乙卯丙辰などの日にて、天一神東の方に在れば、四十三今我が居る所禁中などにも、我家にも同じ、より、直に東の方へ向ては行かずに、南か北などへ向て、わざ／＼行て、或は一夜其所に宿りなどして、さて東の方へ行けば、直に塞たる方へ向はぬやうになりてよろしき故に、然する事なり。是をかた違へといふなり。帚木卷に、「こよひ中神うちよりは、ふたがりて侍けりと聞ゆ云々とて、紀伊守が中川の宿へ、御方違への事も見えたり。此詞書なるは、作者有文朝臣の家より、此女の家へ当りて、此日塞である故に、他へ違へに行かる、なるべし。

相又ノ一本  
藤原有文朝臣

六六 かた時も見ねば恋しき君をおきてあやしやいく夜外にぬぬらん

○片時も逢見ざれば恋しき君をさしおきて、幾夜他の所に寝る事な四十四らんと云て、あやしやとは、思ひもかけぬ所に寝る事よとの意なるべし。猶思ふに、こはもとより、深く思ふといふにもあらぬ女なれど、さのみかれ／＼にもしかたき筋などのあるを、方違へにかこつけて、しばし他の所へ行んを、女に恨

いはせじとのわざなどにもあらんか。さて、塞は、五日六日などの日数あれば、幾夜とはいはれたるなるべし。此歌、かた時と、幾夜と、かけ合せたるなり。かくて、又ノ一本には、詞書、「かたがへにまかり来て、女に遣しけるとあり。かくては、方違へのために、此女の許に来て、直によみかけられたるなり。此方なれば、三ノ句の、あやしや、末句の、寝ぬらん、とあるなど、ことによく合ふさまなり。さるは、今逢見るにつけて、かく恋しく、片時も離がたきこ、ちする君をおきて、此程幾夜、他に寝たる事ならん。我心なか(四十四)ら、あやしき事ぞ、といふ意となればなり。葵卷紫上君に連絡ひて後、源氏「年頃あはれと思ひ聞えつるは、かたはしにもあらざりけり。人の心こそ、うたてあるものはあれ。今は一夜をも隔んことの、わりなかるべき事とおぼさる、とあるなど、思ひ合すべし。

題しらす

里一本  
大江千ふる

六七九

思ひやるりこゝろにたぐふ身なりせば一日に千度君はみてまし

○たぐふは、ツキ属て行くといはんが如し。幾度もく、思ひやる、其心に、ツキ属て行く我身にてあらば、ひと日の間には、千度も君に逢見るにてあるべきものを、身を心に任せざるは、かひなきものぞとなり。異本の方は、三ノ句などもよくは合はぬさまなり。

し**の**びてかよひ侍ける女のもとより、かりさうそくおくりて待(四十五)けるに、すれるかりぎぬ侍けるに

○かりさうぞくは、狩装束なり。すれるかりぎぬは、摺狩衣にて、形を摺たる物なり。伊勢物語初

段に、「此男、しのおずりの狩ぎぬをなん着たりける、とあるなどの類なり。

元良みこ

六〇

あふ事は遠山すどりのかり衣すきてはかひなき音すのみぞなく

○僻案抄に、きぬなどのすりには、多く遠山をすれる物なれば、よめるにこそ。一本には、遠山鳥と有、ねをのみなくといふに、事よれるにや。すりの遠山、いはれある故に、大納言の本には、遠山摺と有、と見えて、正義にも、師説とて、僻案抄のまゝに記されたり。契沖法師も、河社に、延喜式第三十、織部式云、師子、鷹、葦、遠山等綾、後撰に、逢四十五之事は云々、此歌、遠山鳥を、遠山摺とあるは、此遠山綾のたくひに、遠山のやうを摺なせるかといはれ、空穂物語嵯峨院中巻にも、露草して遠山をすれり、と云事見えたり。か、れば、遠山摺とある方や正しからん。縣居翁は、延喜式などに、遠山ずりもあれば、とほ山ずりとあるによる説もあれど、音をのみぞなくといへる、とかく山鳥よりのことばと聞ゆ。しかれども、山鳥のすり衣とつゞくべきよしなし。今思ふに、遠山鳥のかり衣とあるをよしとす。狩衣は、かならずすり衣を用る故に、すり衣といはでも、きこゆればなり。これ古歌のつねにて、巻のはし書とあはせて、心をするものなり、といはれたり。一首の御意は、忍びたる中なれば、逢事は遠ければ、此狩衣を着ては、かひもなき音をのみなく事よとなり。かひも、山の縁の詞なり。三ノ御句は、四十六女の許に来てはと云をかけて、のたまへるにはあらざるべし。二三の御句は、もとより二やうに伝へたるなれば、今にて、いづれをよし悪しとは、さだめがたし。



六二

だいしらず ともたのむ あつよしのみこ  
ふかくのみおもふ心はあしのねの分ても人にあはむとぞおもふ

○僻案抄に、蘆アサの根乱れ合たる物を、分てもとは、思ふ心のあながちなれば、分尋てもと云なり、と見えたり。正義も上に、此巻「あし引の山下しげくはふ葛のたづねて恋ふる我としらずや、とあるに似て、ひたぶるに、深く思ふ心には、蘆の根の如く、いかなる所までも、分尋ても逢んとぞ思ふとの、御意なるべし。蘆は、沼などに生ふる物なれば、初御句の、深くも、縁の御詞ならんか。四十六ウ

しのびてあひわたりける人に たり一本

○逢ひわたるとは、初より今に至るまで、忍びてのみ逢て、年月を経る事なり。

藤原忠国 国忠一本

六三

いさり火のよるはほのかにかくしつ、ありへば恋のしたにけぬべし

○いと忍たる中なれば、漁火の如くに、夜のみほのかに逢わたる事よ。いつもくかやうに心ゆかぬ事にて、在り経なば、終には表にあらはれて、逢ふといふ事もなくて、身は消ぬべき事かなとなり。漁火は、夜のみたく物にて、さて遠くほのかに見ゆる物なれば、夜はほのかにといはん枕詞としたるなり。こひのしたに消ゆとは、表に頭はる、事もなくて、身はいたづらになりぬべしといふなり。此歌二フ(四十七セウ)句にて切て、三ノ句以下を、つづけて心得へし。

寛平のみかど、御ぐしおろさせたまうてのころ、御帳のめぐりにのみ、人はさふらはせ給てちかうも ひ異 そりみ 又ノ本

めしよせられざりければ、かきて御帳にむすびつけ、るり又ノ一本

○寛平のみかどは、宇多ノ帝なり。御くしおろさせ給うては、御落飾の事なり。給ひて給ひてと云は、音便なり。一本には、給ひてと

御剃髪の後なれば、女御更衣などを、御身近くは、召よせさせ給はぬなるべし。

小八条御息所

六三

立よらばかけふむばかり近けれど誰かなこそその関をすゑけんあひ見ぬ関を誰かすゑけん 六帖

○立よらばかけふむばかり近けれど誰かなこそその関をすゑけん  
 で、いとわびしきは、誰かは越る事なかれと云関をは、居たる事ぞとなり。或人は、貫之集に、「立よれば袖にそよめく風の音に近くは聞けどあひも見ぬかな、といふもあれば、今の歌も、初句、立よればの誤かといへれど、猶此御歌にては、よらばにてよろしかるべく思はる。かげふむとは、いと近きをいふなり。万葉二に、「たちはなの影ふむ道のやちまたに物をぞ思ふ妹にあはずて、とあるも、事は違へども、かけふむといへる意は同じ。奈古曾といふ詞を、勿越ナゴトの意に云かけ給へるなるべし。又は、勿来ナゴトの意にてもあるべし。奈古曾関は、陸奥なり。中務集、「みちのくのなこそその関と聞つれどなく、猶もこえぬべきかな、小町集、たいめんしぬべくやとあれば、「みるめかる海人の行かふみなとちになこそその関も我はすゑな四十八きくに、後拾遺卷上「東路はなこそその関もあるものをいかでか春のこえて来つらん、など猶多く、越る事勿かれの意にも、来る事勿かれの意にもいへり。かくて、此御歌の上ノ句、又ノ一本には、「立よらでかけふむばかり近き間にとあり、下句、六帖には、「あひ見ぬ関をたれかすゑけん、とあれども、本集の方まさりて聞ゆ。

六八四

をとこのもとにつかはしける 土左

我袖はなになつ末の松山か空浦 異又ノ一本より浪のこえぬ日はなし

○男の心のかはりたれば、袖に涙の絶間なきよしを、彼末の松山の浪によせて、いへるなり。名にたつとは、契の違ふ事を、末の松山を波の越ゆと、いひならはし来たれば、其いひならはしの方につきてい(四十九)ハウへるなり。かの世間にて、波の越たるよしいひならはす、其松山なるかと云意なり。本歌の、「君をおきをば、波の越る事はなき意なれど、是を本にして、契の違ふ事あるをり(云、松山を波が越たりと云事、常空より云々とは、松山を波の打越ることくさになれるなり。よりにて、本歌の本原(モト)の意をかけて見ては、此歌などには、かなはず。て云々は、末の松山るさまによりていへるにて、恋の方にとりては、涙の多きさまにひ、かせたるなるべし。縣居翁は、袖と云より、うらと云たるものなりといはれたり。こは異本の方によられたるなり。三ノ句のかは、切る、テニツ、なり。此類の別の辞の事、春下巻に委くいへり。

月をあはれといふはいむなりと、中 異いふ人のありければ

○物思ひのある時などに、月をながむれば、いよく物思ひの添ふものなるによりて、忌むといへるなるべし。此詞書に、あはれといふとはあれども、意は、ながむるはといふに、多く違(四十九)はざるべし。此詞書、小町集には、中たえたる男の忍ひ来て、かくれて見けるに、月のいとあはれなるを見て、ねん事こそいとくちをしけれど、すのこにながむれば、いむなるものをついふを、聞かぬ顔にてとあり。かくて、月をあはれといふは忌むといふ事は、宿木卷宿木の巻、中宮に、のたまふ御詞に、いまいと、く参こん、ひとり月な見給ひそよ云々、かくて、猶中ノ君の、月を、ながめておはする事を、老人ともなどいまはいらせ給ひね、月見るは忌侍るものを云々、竹取物語に、かくや、月のおもしろう出たるを見て、つねよりも物思ひたるさ

まなり、或人の、月の顔見るはいむ事とせいしけれども、ともすれば、ひと間にも月を見て、いみじくなき給ふなど、又白楽天が詩などにも見えたり。(四十九之)

小町又ノ一本  
よみ人しらず

六五

独寝のわびしきま、におきあつ、月をあはれといみぞかねつる

○月を、あ、はれくとながむる事は、忌む事とは知て居れども、一人寝のわびしきによりて、幾夜もく、かく起居ては、忌かねて、かくながむる事よとなり。

をとこのもにつかはしける

六六

から錦をしきわがなはたちはて、いかにせよとか今はつれなき

○錦の美しきは、裁切事のをしき物なれば、唐錦タカキ云々といへるなり。古今、雜上、「思ふどちまどるせる夜はからにしきた、まくをしき物にぞ有ける、など同じ枕詞なり。をしき我名は、君ゆゑに立はてたるを、今さらに、我身はいかにせよとて、かく君はつれなくし給ふぞと(五十才)なり。人わらへにもなり侍る事の、悔しさよといふをも、ふくめたるなるべし。

はじめて人にのたまひ、又ノ一本つかはしける

六七

人づてにいふことの葉の中よりぞおもひつくはの山はみえける

○人のつてをもとめて、かく遣す、此文の中に、筑波山は山しげ山といへるが如き、此方のしげき思ひは見ゆるを、よく見て、心のおくを知て給へかしとなり。思ひつくはと云を、思ひを彼方へ、カナタつくる事に

いひかけたるなるべし。思ひを附くとは、我が思ひを、彼方へ附<sup>ツク</sup>属る意なり。次の歌の、心を人につくるなりけりとある、心をつくといふに、多くたがはざる詞なり。

はつかに人を見てつかはしける (五十二)

○はつかには、いとわづかに、はつ／＼に見たるなり。古今、恋二「春日野の雪まをわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも。

貫之

六六 たよりもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり

○此歌は、古今恋二に、題しらず、元方と出たり。一首の意は、何ぞの便にこそ、物をことつけやるものなれ、たよりもあらぬ我思ひを、かく君につけやるがあやしきとなり。心をつくとは、心を先へたぐへやるなり。

人のいへより物見にいづるくるまをみて、こゝろづきにおほえ侍ければ、たそとたづねとひければ、いける家のあるじとき、(五十一)で、つかはしける

○此詞書、終のつかはしけるといふ事、一本にはなし。心づきとは、俗に、氣<sup>キ</sup>二入タリといふに同じく、我が心になひておほえたるなり。たそとは、誰<sup>誰</sup>ぞとなり。家のあるじとは、其家の本妻の事なり。帯木巻に、せばき家のうちの、あるじとすべき人、ひとりと思ひめぐらすに<sup>云々</sup>、とあるなど同じ。

六九

人づまに心あやなくかけはしのあやふき物は道抄又ノ一本こそありけれ一本こひにぞありける

道友一本  
よみ人しらす

○人妻に、あやなく心をかけしといひかけて、梯カクシの危アヤシきとうけたるなり。恋によりては、身をいたづ

らになす事も多かる物なれば、危しとはいへるなり。ことに人の妻なれば、道ならぬ事にもあればなり。

さ(五十一)れども、かくいひて、猶懸想の意もこもるべし。抄に、朱子の自誓の詩を引たるは過たり。さ

のみこちたく解すべきにはあらず。万葉四、「さかきにも手はふるといふをうつたへに人づまといへばふ

れぬ物かは、同卷一「むらさきのほへるいもをにく、あらば人づまゆゑにわれこひめやも、などあるを

も、引合せて心得べし。歌によりては、教誡の意なるも、なきにはなあらねど、もとはささ意ならぬをも、教誡の意なりとすれば、さも見ゆるも

たゞ風林高く、人情の真を失はざらんこそ、大事なれ。是らの論委くは、追考に記せり。かけはしは、和名抄云、梯、音低。和名、木階、所也ル以登キニ高也。唐韻云、棧、上。同。板木構レ陰為レ道也。

人をおもひかけて、心ちもあらずやありけん、いものもいはずして、日なんくるれば、おきもあがらずとき、

て、このおもひかけたる女五十二のものもとより、などかくすきくしくはと、いひて侍ければきものにいほる、などいへりければ、又ノ一本

※つかね緒云、人を思ひかけて、こゝちもあらず有て、物もいはずして、日くるれば、おきもあが  
らざりけるを聞て、此思ひかけたる女の許より、などかくすきくしくはといひて侍ければ。

○或人は、いものいはずとあるは、えものいはずとありしを誤れるか、又は、いとえと通へば、こ

のまゝにてもあるべきかといへり。今思ふに、こは、えものもいはずとあるべきさまにもあらねば、

猶いはずのいなどより、ふと誤れるなるべし。などかくすきくしくはとは、いかでさやうにあだ  
くしく、好色ヌキめきたるさまにはし給ふぞ、といひおこせたるなり。あだなる心にて、つくり事な

どにする事の如くにいひおこせたるものなり。此詞書と、歌とのさまを、味ひ見るに、かく思ひは  
かけながら、いまだ此女の許へは、かくといひもやらで居たるを、女も、我に心ありての事ならん  
とは、おしはかりな(五十二ウ)がら、さやうにほのめかすべきにもあらねば、たゞ何となきさまに、  
とぶらひおこせたるなるべし。

六五

いはで思ふ心ありそのはま風こどもに立しら浪又一本のよるぞわびしき

○我は、此ごろは、心の中にのみくよくと思ふ事があるなり。それ故に、昼の間も、うつゝの心もなき  
やうにてくらすなるが、夜はことにまぎるゝ事もなく、思ひつゝけられて、難義なる事に侍るよといふに  
て、不言思ふ心ありと云かけて、ありその浜風にたつ白浪の、といふまでは、よるぞといはん料に、中間  
に入たる飾詞なるべし。さて、かくうつし心もなく、ほれぐしくなり果たるは、誰ゆゑにもあらず、全  
く君故ぞといふ事をは、ふくめたるものと見えたり。さるは、女の許よりも、よそげにとひおこせれば、  
こなたもよそげに、それとはい(五十三ま)はで、おしはからるゝやうにこたへたるなるべし。金葉恋下下に、「人  
しれぬ思ひありその浦風に波のよるこそいはまほしけれ、とあるは、今の歌によられたるものか。ありそ  
の浜は、越中国、射水郡といへり。但し、ありそ海など云たるには、荒磯アラシの意にて、名所とはなしに、海  
の惣名といはんが如きも多かれども、此歌などのは詞のつゞきさま、地名と聞ゆるなり。然れども、此あ  
りその云々といふは、歌の意にか、はる事にはあらず。思ひ混ふべからず。かざり詞を、中間におきたるは、  
万葉十、「わがせこにわがこふらくはおく山のあしびの花の今さかりなり。此歌、三四ノ句は、さかりと  
いはんための、句中の序なりと、略解にも見えたり。また、古今恋三、「みつしほの流ひる間をあひがたみ  
みるめの浦浦によるをこそまで、下恋六、「我ならぬ人すみのえ(五十三ウ)の浦にいで、なにはの方をうらみつ

るかな、とあるなどの類なり。又試に、一説をいはゞ、一首の意は、そなたの事を思ひかけながら、いまだ口へは出さず、心の中に思ふ事あるのありなるが、其思ふ方より、しらす顔に、風の吹て、かくとひおこせ給ふ、波のよるが、いよ／＼物思ひの種となりてわびじき事よ、といへるならんか。かく見る時は、ありその云々といふも、飾詞にはあらず、ナゲ比たる詞となるなり。

心かけて侍けれど、いひつかんかたもなくつれなきさまにの抄見えければ、つかはしける又ノ一本

※つかね緒云、心かけて侍けれど、いひつかむかたもなくつれなきさまに見えける女の許に、つかはしける。

○いひつかんは、言ひ附んにて、言ひ寄らんといふに近し。

六二

ひとりのみこふればくるしよぶね鳥声又ノ一本に鳴出て君にきかせん

○人にもしられず、我一人して思ひつめて恋居れば苦しきを、呼子鳥五十四卷の如く、声に立てなきて、君にきかせんとなり。又思ふに、ひとりのみといひて、よぶこ鳥といへるは、呼子鳥といふ名につきて、此鳥は、鳴かはすもの、如くにいひなして、君がこたへし給ふべきやうに、声立て鳴んといふ意も、こもるべきか。又一説、よぶといふ詞につきて、其人とさしてよぶ事ぞといふ事のしらる、やうに、君にきかせんといふにもあらんか、なども考へつれども、猶はじめの説の方や、おだやかならん。

をとこの、女にふみつかはしけるを、返事もせでたえにければ、又男の又ノ一本つかはしける

○此詞書、又一本には、をとこのふみつかはしけるを、返事をせざりければ、たえにけるかといひに、つかはしけるとあり。五十四卷かくて、つかね緒に、「あひしりて侍ける女に、ふみつかはしけ



六五二

ふしなくて君がたえにし白いとはよりつきがたき物にぞありける

るを、返事もせでたえにければ、又つかはしける」となほされて云、此詞書、本のまゝにては、いまだあはぬ女のもとへ文やりたる如く聞えて、絶にければといふにも、歌にもかなはず、又、男のといふことはのぞくべし、と見えたり。

○これぞといふ、絶べき子細もなく、絶給ひたれば、今はいひより近づきがたしといふを、糸の縁にていへるなり。ふしは、和名抄云、類、伊展之布之、糸節也とある。此糸の節を、これぞと絶べき子細もなく、といふにかけたり。拾遺、恋四、「うかりけるふしをばすて、白糸のいまくる人と思ひなさん。よりつきがたきは、糸の方にては、搓縷な(五十五ま)の字の意にて、万葉卷四に、「吾がもたるみつあひに搓流レ絲もちてつけてしものをいまぞくやしき、とありて、略解にも、搓は、廣蒼云、以レ手搓レ糸為レ縷と見え、同十二に、「玉緒を片緒に搓ユリ而緒をよわみ乱る、時にこひざらめやも、古今、恋一「かた糸をかなたこなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせん、同、大御歌「青やきを片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ、などあるに同じく、今の俗にも、糸によりをかくるといふに同じ。それを、今の歌の恋の上にては、かのつれなき女なれば、其あたりへ、いひより近づかん事も難き意にいへるなり。

をとこの、たびよりまでうきて、いまなんまでうきつきたるといひて侍けるける返事に又ノ一本

六五三

草枕このたびへつるとし月のうきはかへりてうれしからなん(五十五ウ)

○此年月、旅におはして、長々の間の憂かりしだけ、今帰給ひてより、此末長く、御心がはりなどもなく、うれしくあらまほしき事よといふなり。此旅に、此度、帰てに、却てをかけたなり。新古今恋三「かぎりな

くむすびおきつる草枕いつ此たびを思ひわすれん

をとこの、ほど久しうありて、まできて、み心のいとつらさに、十二年の山ごもりしてなん、ひさしう  
 きこえざりつるといひ入たりければ、よびいれて、ものなどいひて、返しつかはしけるが、又おともしせ  
 ざりければ  
の給ひて返しけるが、又おともしせざりければ女のつかはしける 又ノ

○久しくとだえて後に、男の来て、其許の御心が甚つらき故に、久しく山に籠りてありし故に、お  
 とづれを申さざりしなりと、人づてにていひ入れたる故に、こなたに入給へと、よび入(五十六)まれ  
 て、物語などして返したる其後、又例の如くにおとづれもせざりしによりて、此歌を遣したりとな  
 り。十二年の山籠とは、類聚国史に、弘仁十三年、六月壬戌、傳燈大法師位最澄言云々。伏望ララス  
 天台法華宗、年分度者二人、於比叡山、毎年春三月、先帝國忌日、依法華經制、令得度受戒、  
 十二箇年、不聴レ出レ山云々。また、天長八年夏四月丁丑、天台之宗、年分度者、受戒之後、一  
 十二年不レ聴レ出レ山、四種三昧、令得修練云々。故也、とあるなどをもとにて、此ころ常にあり  
 し事なるべく、枕草子にも、おほつかなき物、十二年の山籠の法師の女親、など見えたり。されど  
 此詞書なるは、たゞ久しかりし事を、戯にかくはいへるなり。もとより法師にもあらねば、実に山  
 にこもりたるにはあらず。又久し(五十六)きとだえとても、多くの年を、隔つべきにもあらねばな  
 り。

六五 いでしよりみえずなりにし月影は又山のはに入やしにけむ

○一度山を出しとのたまひて、此方へも来給ひしに、又見えずなり給ふは、二度又山籠やし給ひしといふ

を、月にて為立シタテたるなり。月は山より出て、又山に入る物なればなり。

返し

六五 あしひきの山におふてふもろかづらもろとにもこそいらまほしけれ

○上ノ句は、もろともといはん料ながら、初二ノ句は、山に入るといふ事の用にいへるなり。此類の上ノ句は、しばらく有心の序などいふべきなり。一首の意は、い否なとよ、我は此度はいまだ山には入待らず、此度又山に入らんには、君と諸共にこそ、入らまほしき事なるよと云(五十七)なり。もろかづらは、抄に、賀茂の葵桂をいへりといひ、契沖法師雜記には、もろかづらにふたつあり。新古今に、「見ればまづいと、涙ぞもろかづらいかに契てかけはなれけん、これは、祭の日、桂に葵をかけたるをいへり。後撰に、「あし引の云々、六帖に、「かみつ代のいがきにはへるもろかづらこなたかなたにかけてこそ見れ、これは、はひあへる葛をいへるなるべしとありて、縣居翁の書入に、はひあへる故に、もろかづらといふとも聞えず、さる名のかづらひとつ有にやとあり。又古今集餘材抄には、物名葵桂あふひを、桂の枝にかくるを、もろかづらといへりとありて、打聴にも、或人、此二つをもて、諸かづらと云といへるは、しかるべしと見えたり。今思ふに、葵のみの事をも、諸かづらといへるやうなり。新古今上に引たの詞書に、身の望かなひ(五十)セウ侍らで、杜のまじらひもせで、こもりゐて侍けるに、あふひを見てよめる、鴨長明、とあれば、桂の事にはあづからぬが如し。かくて、葵は二葉二葉対二葉ひ出る物なれば、モロハカヅラ諸葉葵の意にて、もろかづらといふにはあらざんか。や、後に、諸葉草といへるをも、引合せて思ふべし。現存六帖、中原「そのかみのみかげの山のもろは葉をけふはみあれのしるしにぞとる。

人をおもひかけてつかはしける

※つかね緒云、おほつぶねを思ひかけて遣しける。

平定文

六六

はま千鳥たのむをしれとふみそむる跡うちけつな我をこすなみ おきつら浪一本

○君を我が、頼む心を知れとて、かく文をやる事ぞ、此文にこもる深き心を、いたづらには消し給ふとなり。文字を、鳥の跡といへばな(五八)むり。古今雜下「忘れん時しのべとて浜千鳥行へもしらぬ跡をとぐむる、など猶多し。波は、真砂路へうちよせて、千鳥の跡を消すべき物なれば、波に令オホせたるさまにいへるなり。我身こす波は、我に荒き波と云やうにも解くべきか。古今、恋五「わたつみの我身こすなみ立かへり海人のすむてふうらみつるかな。

返し

おほつぶね

六七

ゆく水のせごとにふまむ跡ゆゑにたのむしるしをいづれとか見ん

○千鳥は、所さだめず、いづこへもく、跡をつくるものなれば、といひて、君の文をやり給ふも、我方のみにあらず、数多アツク所の事に侍れば、いづれをか、頼給ふしるしとは見侍らんといふなり。

人のもとに、はじめてふみつかはしたりけるに、返事はなくて、た(五十八)だかみをひきむすびて、返したりければ 光異源もろあきらの朝臣

六八

つまには一本 一本つまにおふることなし草をみるからにたのむ心ぞかすまさりける

○抄に、ことなし草は、物忌を付る物なり。忍草の異名なりともいへり。されば、つまに生るとは、軒のつまなり。何もかゝざる紙を、何の事もなき心にてなぞらへよめり。しのぶといへる名につきて、頼む心ぞ数まさるとよめるにやとあるが如し。ことなし草を、忍草の異名とせる事は、しのぶといふより、無言の意にとれるなるべし。河海抄卷木に、又、むかし忍草に、物忌を書て御簾にもつけ、冠にもさしけるなり。是は忍草の一名、ことなし草といふにつきて用レ之、無レ事よしなり。後撰貫之が歌に、「かざすともたちとたちにし我名にはことなし五十九草のかひやなからん、冠にさす故なり云々。此忍草は、裏の白くて、短き草なり。軒端などに常に生る草なりと見えたり。和名抄、苔草類に、本草云、垣衣、一名烏蕪和名、之乃布。今思ふに、忍ぶといふより、無言コトナシの意にとり、それより又、無事コトナシの意にもとりて、物忌をもつくる事とはなりたるべし。枕草子に、ことなし草は、思ふ事なきにやあらんと思ふもをかし。六帖、「こりずまのまつにはいと、年ふれどことなし草ぞ生そはりける。又、「君みてしほどのふるやのひさしにはあふことなしの草ぞ生ける、などもあり。しのぶといふ詞は、縣居翁の、万葉考に、専らしたふ心によみて、隠す心なるはいと少もとよりなり。すべてしのおといふは、むねのうちに思ふ事を、おしこたへてある事なり。其おしつけおくより、あらはさぬ事にもなり、又むねに忘れぬ事にもなる故に、むかしをしたふ事にも転せり、その本をしる時は、さまざまにわかれたる意の、行方もしらるべし、といはれたるにて心得べし。こは例のこと五十九ウのついでに記したり。

かくておこせて侍けれど、みやづかへする人なりければ、いとまなくて、又のあしたに、とこ夏の花につけて、おこせて侍けるたり抄一本同

○此詞書、又一本には、かくておこせたりければ、またのあしたに云々、とのみあり。つかね緒にも、かくいひやり侍ければ、又の朝に、とこ夏の花につけて、かへし」となほされて、宮づかへ云々の

詞は、さしも用なければ、なくても有べし。一本に、よみ人しらずと有、よろしといはれたり。されど、此宮づかへする人なりければといふ事も、すてがたきやうにおもはる、事もあるなり。そは下にいふべし。

よみ人しらず抄一本同(六十才)

六九

おく露のかゝる物やおもふらんとおもへどもかれせぬものはなでしこのはなとこなつ抄一本同

○此歌、上のつまにおおかけ歌のかへしには、いさゝか異なるいひざまなれば、よくも心得がたし。抄には、かくつれなき物とは思ひ給へども、枯せぬ物なれば、なほ頼給へとの心なりとあり。此意ならんか。猶程々に考へたる事を、試にいはいはゞ、恋といふ物は、物思ひの種となりて、涙の流る、事おおく露のあるべき物ぞとは思へども、さやうに心深きさまに、をりくゝいひをこせ給へば、さすがによそには思ひ離わかかたく侍り、と云にて、こゝに至て、諾ななふ意ならんか。此意と見る時は、二ノ句のかゝるの詞は、斯有(カクアル)を兼たるには、初に、白紙をおこせたるも、承引ウケヒかぬ心とは見えざればなり。又一説、かゝる物とは云々は、斯様なる我身のやうなるものぞとは、知給へども、思へども、即存知ナ猶思ひ(六十才)かれせず、のたまひおこせ給ふ事かな、といふならんか。斯様なるものとは、我身はおかしき心、風流ミヤビたる事もなき身といふ意にいへるなり。俗言にいはず、私(ワタシ)ガカヤウナモノトハ、即存知(コソウチ)デ、といふなり。容儀のよからぬ、心今一説は、かゝるもの」といふ下に、をの辞を加へて聞く意にて、我身のやうなる、斯様なる者モノを、とかくのたまふは、実の御心にてはなく、御戲ウケアリ也。俗三云オナならんとは思へども、しばゝのたまひおこせ給ふは、此方も思ひ離わかがたきものに侍り、といふならんか。かくていづれの意に見ても、此女の返事の極まる所の意は、心軽く従ふべき意におつるさまなり。さる故に、又の男の返しに、「かれずともいかにたのまん云といひやられたるにてもあるべし。此贈答の、初よりのさまを見るに、い

まだ、一度だに逢ひたる中にもあらず。さるを、「かれず云六十一」とも云など、いふべきにはあらざるべきを、かくいひやられたるには、やうある事なるべし。故レ思ふに、詞書に、みやづかへする人なりければ云とあるを、思ひ合はするに、宮仕人の、あだめき心軽きさまなるは、大かたのならひなれば、さも深く心入るとはなけれど、かなた女の口ごはき間は、此方より深く心入る、さまに見せ、かなたのなよびゆくさまに見れば、又かへりて心浅きさまなりとうらみなど、いけみころしみ、戯がてらに物せられたるにはあらざらんか。又ノ一本に、「かゝる物と思ふらん、とある方にては、白紙を参らせたるによりて、たのむ心ぞ数まさるなどのたまふは、猶かゝり所ある事と、おほすにやあらん。此方の心は、いつも同じ事にて、諾ヌなひ参らすにはあらぬものを、といふ意にもあらんか。されど、此云六十一ノ意と見る時は、撫子の花も少しあたらぬやうなり。又下ノ句の勢ひにも、次の「かれずとも云」にも、よくもあはぬさまなり。よく味ひ見るべし。

返し

七〇〇

かれずともいかゝたのまむ撫子床夏の花はときは色物一本にしあらねば

○かれせぬ物はいふにあたりて、不枯とても、いかゝ頼にはすべき。此撫子は、常磐の色ならねばとなり。上夏、「色といへばこきもうすきもたのまれず大和なでしこちるよなしやは、とあるにや、似たり。かくて此二首の歌、抄本一本などに、とこなつとある方、然るべく覚ゆ。恋にては、床の意をかくる事多ければなり。

後撰和歌集卷第十新抄（六十二才）

付記 本巻の翻刻は伊藤一男氏（東京学芸大学助手）の協力を得た。記して謝意を表します。